自由キマま！な学園生活

樹ー打守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自由キマま！な学園生活

【Ｎコード】
Ｎ３１０３Ｕ

【作者名】
樹ー打守

【あらすじ】
ネギの義理の兄「レント・スプリングフィールド」
ネギと共に訪れた麻帆良学園で彼は自由にやってます！

第１部スタート！

プロローグ―自由人の物語（前書き）

作者「この小説を読んで下さった皆さん、はじめまして」

レント「はじめまして」

作「まだまだ駄文も多いと思いますが――」

レ「始めからそんな弱気でどうするよ・・・

とにかく、楽しんでくれよ？」

作・レ「それでは、どうぞ！」

プロローグ―自由人の物語

「ふわぁ～ぁ」

1人の少年――黒い髪に少し青のかかった黒い瞳をした――が大きな欠伸をしてベッドから起き上がった

「・・・眠ぃ」

そう言うと少年はもう一度ベッドへ倒れこんだ

「（今日は何か予定があった気がするんだけどな・・・）」

眠気に負けそうになりながら考えていると1つの事を思い出した

「ん？アレ？今日って・・・ネギの卒業式の日か？」

自分の部屋の時計を見て一言・・・

「遅刻だァァァ！！！」

少年――レント・スプリングフィールドは急いで身支度を整えると全速力で魔法学校へ向かった

主観　レント

まさか・・・こんな日に遅刻するなんてな
あ～、ネギ、アーニャ、ネカネさん・・・起こしてくれてもいいんじゃないか？
そんな事を考えていると、見えてきたのは

――メルディアナ魔法学校
一般的には迷信と信じられている『魔法』を密かに教える学校――

「って感じか？
・・・誰に説明してんだ俺は・・・？」

まぁ、取り敢えず入ることにしよう

「失礼しますよ～っと」

卒業式だから・・・あっちか？何にせよ急ぐか

主観　ネギ

「卒業証書授与――

この七年間よくがんばってきた
だが　これからの修行が本番だ　気を抜くでないぞ」
僕は五年だったけど、卒業か・・・何だか寂しいな・・・
それに、レント兄さんも来てないし・・・しっかり起こしたほうが良かったかな？

「ネギ・スプリングフィールド君！」

ぼ、僕の番だ・・・お、落ち着いて・・・

「ハイ！」

兄さんにも見てもらいたかったな・・・

っていつの間にか兄さんがいる？

主観　レント

ふう、ネギが卒業証書を受け取るのには間に合ったか・・・

さて、ネギに会いに行くかな

「ネギ、何て書いてあった？

私はロンドンで占い師よ」

「修行の地はどこだったの？」

二人がネギに聞いている時

「おーい！」

「レント（兄さん）（さん）！」

「ったく・・・俺が朝起きられないの知ってんだろ？

起こしてくれよな～」

そうしてくれれば余裕を持てたからな！

「私達は起こそうとしたわよ！レントさんが起きなかっただけ！」

「あはは・・・アーニャが殴ろうとするのを止めるの大変だったんだよ？」

「せっかくのネギの卒業式にケガを作って行くのはイヤでしょう？」

分が悪くなってきたな・・・話を反らすか

「ところでネギはどんな修行するんだ？」

「「「（（（話を反らした・・・））））」」」

おい、そんな呆れた顔で見なくてもいいだろ

「えーと・・

日本で――先生をやること」

おいおい・・・マジで？

「「「「ええ～～～～！？」」」」

「こ、校長『先生』ってどーゆーことですか！？」

「ほう・・・『先生』か・・・・」

「何かのマチガイではないのですか？
１０歳で先生など無理です」

「そうよ
ネギったらただでさえチビでボケで・・・・」

「ふぅ・・・」

溜め息がでるな・・・何かの因縁か？
ついでにアーニャ、相手は校長だから敬語ぐらい使おうな

「しかし、卒業証書にそう書いてあるのなら決まったことじゃ
立派な魔法使いになるためにはがんばって修行してくるしかないのう」

それに・・・

「それに、初めての事ではない」

「「「え？」」」

やっぱり言うのか・・・
まあ、今更隠す必要も無いか

「そこに居るレント・スプリングフィールドも同じ修行をしたからのう」

少し溜めて～・・・

「「「「えぇ～～～～！？」」」」

「3年飛び級してたから俺が9歳の時の話だけどな」

「「「「えぇ～～～～！？」」」」

この流れだと・・・

「ではレント、ネギと共に日本へ行ってくれないかのう？
ネギも安心するじゃろうし先生としての知識も教えてやってくれ」

やっぱりかぁ～・・・
ん～・・・それはそれで楽しそうだな・・・

「わかりました
手助けし過ぎない程度に手伝います」

ネギはまだ不安そうだけどな

「ふむ・・・・
安心せい――修行先の学園長はワシの友人じゃからの
ま　がんばりなさい」

「ハイ！
わかりました！」

「さてと、ネギは日本語の練習を始めないとな
ネカネさんって日本語上手いですよね？付き合ってもらえますか？

アーニャも勉強しとくか？損はないぞ」

「うん！」「はい！」「ええ！」

久しぶりの日本だな・・・楽しんできますか！

プロローグ―自由人の物語（後書き）

作「どうでしたか？楽しんで頂けたなら幸いです」

レ「・・・俺の活躍は？」

作「え？」

レ「俺遅刻して走っただけだよ！？寝坊助キャラにしかなってないよ！？」

作「ま、まぁプロローグだから・・・次回に期待を！」

レ「そういうことだから続くように感想とかを送ってくれると作者が喜ぶかもな

・・・それにしても口調はもう少し柔らかくしてもいいんじゃないか？」

作「いや、ちょっと、緊張が・・・」

レ「ふーん、まあいいか

それでは！」

作・レ「次回をお楽しみに！」

第1話　自由人の初日（前書き）

作者「どうも、作者の樹ー打守です」

レント「一応主人公のレント・スプリングフィールドです」

作「今回は原作1話の話ですが・・・」

レ「多少の変更と独自の設定があるな」

作「それは後書きにて・・・」

作・レ「それでは、どうぞ！」

第1話　自由人の初日

主観　ネギ

日本語の勉強を始めてから数ヶ月・・・とうとう麻帆良学園を訪れる日が来ました！
でも・・・

「ネギ、ここからは別行動な」

「え？」

何で別行動するのかな？

「どうして？」

「実はな、俺が修行した時にこういう電車とかが面倒だったから学園長の部屋に転移出来るように細工がしてあるんだよ」

「ええっ！？そんな簡単に魔法を使ってもいいの？」

「露見（ばれ）なかったらいいんだよ
それじゃ、頑張れよ！」

「に、兄さん！？」

兄さんが消えた・・・一人になると少し不安だな
でも頑張らないと！

主観　レント

さて、そろそろ着くかな？

「ほいっと」

「むぅ？

何じゃレントか」

何じゃって・・・ちょっと酷くないか？

「お久し振りです学園長」

「うむ、久しぶりじゃの」

さて、一つ聞かないとな

「学園長、この学園での俺の立場はどうなるのですか？」

「君にはネギ君が担当するクラスの副担任兼指導教員になってもらおうかの」

副担任兼指導教員か・・・

でも・・・

「これはネギの修行でもあるわけですから、基本的にはネギに仕事をしてもらいますよ？」

「そうじゃろうな
ネギ君に仕事のやり方を教えるのが基本的な仕事じゃの」
ま、それだけじゃないだろうけどな
「わかりました
それでは失礼します」
ふぅ、ネギが来るまで待つか
「レント君」
ん、この声は・・・
「タカミチ！久しぶりだな！」
「君も変わっていないようだね」
「そんなこと言うなよ伸長も伸びたし・・・あの頃よりも強くなったぞ
なんなら組み手でもするか？」
前やった時は咸卦法使われて負けたんだよな・・・
良く言えばそんだけ拮抗してたってことかな？
「いや、止めておこう
授業をするのにお互いボロボロになってはいけないからね」
「それもそうだな
でも、いつかやろうな」

「ははは、楽しみにしてるよ」

今の俺なら勝てるかな？

・・・『能力〈ちから〉』を使えば或いは・・・

でも、使えないよな・・・

「ん？ネギ君が来たみたいだよ？」

「そうか、なら下に行ってくるよ」

「この度　この学校で英語の教師をやることになりました

ネギ・スプリングフィールドです・・・・」

「え・・

ええーーっ！

ちょ、ちょっと待ってよ

先生ってどーいうこと！？

あんたみたいなガキンチョが！」

「まーまーアスナ」

誰だ？あの二人の女の子は？

「いや、彼は頭いいんだ安心したまえ」

「先生・・・・

そんなこと言われても・・」

ま、普通は納得しないよな

「あと、今日から僕に代わって君達Ａ組の担任になってくれるそうだよ」

お、ツインテールの子が凄く落ち込んでる顔をしてるな
後ろに「がーん」って文字が見えるような気がするな

「そ、そんなぁ
アタシ　こんな子イヤですさっきだってイキナリ失恋・・
いや、失礼な言葉を私に・・・・」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言うなー！」

ネギ・・・俺と別れてから何があった・・・

「まあまあ、抑えてくれないか？アスナ（？）さん
ネギも悪気があったわけじゃないんだ」

「う・・・
で、でも失礼な言葉を・・・ってアンタは誰？」

ん？自己紹介してなかったか？

「俺はレント・スプリングフィールド
そこに居るネギの兄だよ
何を言ったか知らないが（予想は出来るけど）許してやってくれな

いか？」

「わ、わかったわよ
でも、二度と今みたいなことを言わせないでよ！」

「ってことだ
気をつけろよネギ」

「うん、わかったよ」

「なーなー
そろそろおじいちゃん・・・学園長先生のとこに行かへん？」

「そうだな
行こうか」

学園長のところに行く間に二人について聞いた
ツインテールの子が神楽坂明日菜って名前らしい

黒髪の子は近衛木乃香っていう名前
学園長の孫らしい・・・その割には魔力が感じられないような・・・
力を隠してるのか魔法を知らないのか・・・多分後者かな？

「学園長先生！！
一体どーゆーことなんですか！？」

「まあまあアスナちゃんや」

「修行のために日本で学校の先生を・・・・
そりゃまた大変な課題をもろうたのー」

修行って言っていいのか？二人ともわかってないみたいだけど・・・

「は、はい
よろしくお願いします」

「ま、いきなり正式な教員は出来ないだろうけどな」

「うむ、まずは教育実習とゆーことになるかのう」

「はあ」

「今日から3月までじゃ・・・・

ところでネギ君、レント君には彼女がおるのか？
どーじゃな？うちの孫娘〈このか〉なぞ」

「ややわ、じいちゃん」

そう言って金槌で学園長を叩く木乃香・・・
大丈夫か？

「学園長、孫だからといって色恋沙汰に口を出すのは感心しませんよ」

「フォフォフォ」

・・・多分止めないな

「ちょっと待ってくださいってば！

だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！
しかもうちの担任だなんて・・」

「ネギ君
この修行はおそらく大変じゃぞ
ダメだったら故郷〈くに〉に帰らねばならん
二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな？」

何気に明日菜をスルーしたな

「は、はいっやります
やらせてくださいっ！」

「・・・・うむ、わかった！
では今日から早速やってもらおうかの
レント君、指導教員として頼んだぞ」

「はい、わかりました」

「そうそうもう一つ

このか、アスナちゃん
しばらくはネギ君とレント君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？
まだ住むとこ決まっとらんのじゃよ」

「はい？」「げ」「え〝・・・・・」「ええよ」

学園長・・・一体何を・・・

「もうっ

そんな何から何まで学園長ーっ！」

「レント君は結構かっこえーし、この子もかわえーよ？」

いや、木乃香・・・そういう問題じゃないと思うぞ

「学園長・・・ネギはともかく、同年代の俺はまずいでしょう」

「フォフォフォ・・・それならレント君は二人に手を出すつもりかのう？」

「そういう事ではありません
一つの部屋でこの年の男女が過ごすといったら不安になるのが当然でしょう
この学校には宿直室があったはずなので俺はそこで寝泊まりします」

「ふむ、まぁいいじゃろう」
「なら学園長、このガキも・・・」

「ネギ君は大丈夫じゃろう？」

仲良くしなさい、この一言で明日菜も諦めたみたいだな

で――
教室まで廊下を歩いてるわけなんだが・・・

「なぁ、木乃香」

「どうしたん？レント君？」

「何であの二人はこう・・・ギクシャクするんだ？」

「アスナは子供が嫌いやからな～
あと、さっきアスナに失恋の相がでてるってゆーたからやないかな？」

そうか・・・今の女の子はそういう年頃だからな～

「あんたなんかと一緒に暮らすなんてお断りよ！！
寝袋ででも暮らせばいいでしょ・・
じゃあ私先行きますから先生！！」

そう言って走って行く明日菜と木乃香・・・
寝袋はキツくないか？せめてテントぐらいは・・・

「あ・・
何ですかあの人は～～？」

「ま、最初はこんなもんだろ
信頼される先生になろうな」

「うん、そうだね！」

頑張れよネギ
・・・そういやクラス名簿を見てなかったな
どれどれ・・・

色々問題がありそうだな・・・特にエヴァンジェリン・・・俺の修

行の時にも居たな
やっぱりナギさんの「登校地獄」が解けないのか・・・

「ネギ、クラス名簿だ」

「ありがとう、兄さん」

「初授業、頑張れよ」

「あ・・う・・・・
ちょ、ちょっとキンチョーしてきた・・・」

「最初はしょうがないさ
ほら、このクラスだぞ」

ネギが窓からクラスの中を見てるが・・・結構多いな・・・

「そうだクラス名簿！
げっ・・・・い、いっぱい・・・・」

げっ・・・・ってそんな反応はするなよ・・・

「生徒の顔と名前は早めに覚えような」

「あうっ・・」

緊張してるな・・・それで気付いてないんだな、黒板消しに・・・
ま、少し使わせてもらうかな

「失礼しま・・・・」

黒板消しが落ちる・・・がネギの張っている障壁で浮遊する黒板消し・・・
戸惑い以外の表情を見せる数人・・・高確率で魔法に関係してるなエヴァンジェリンも居るからな、

何人か居てもおかしくはないけど・・・少し多いな・・・
さすがに黒板消しに気付いて障壁を解くネギ

「ゲホゲホ
いやー、あはは
なるほど、ゲホ　ひっかかっちゃったなあ、ゴホ」

ネギ、足元を見たほうがいいぞ？

「へぶっ！？」

ロープに足を引っ掛けて転がる

「あぼ！？」

上から水の入ったバケツが落ちてきて両方を被る

「あああああ
ぎゃふんっ！？」

転がっている途中に何処からか飛んできた玩具の矢が数本当たった
止めが教壇に叩きつける・・・やりすぎじゃないか？

とはいえ相手が子供だったことに気付いて心配する全員、さてと・・・

・

「いや、新しい先生だよ
自己紹介をすると、俺はレント・スプリングフィールドこのクラスの副担任を担当する
3学期の間、よろしくな
ほら、ネギ」

「ええと
あ・・あの・・・
ボク・・・ボク・・・
今日からこの学校でまほ・・・・英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです
3学期の間だけですけどよろしくお願いします」

沈黙・・・

「「「「「「「キャアアッ!!!
か、かわいいい（かっこいいい）ーー」」」」」」」

び、吃驚した!

・・・色々質問されたけど取り敢えず歓迎はされてるみたいだなって突然明日菜がネギの胸ぐらを掴んだ!?

「ねえ、あんたさっき黒板消しに何かしなかった?
何かおかしくない?あんた」

お、さっきのに気付いたのか?
・・・実は鋭いのか?ってバレたらネギがオコジョになるじゃん!

その後は委員長・・・もとい出席番号２９番、雪広あやかが止めた・・・が今度は明日菜と委員長が喧嘩を始めた
ネギは止めようとしてるけど・・・まだ無理だろうな・・・しょうがないな

「おーい！授業を始めるぞーっ！
ネギ、始めるぞ」

「う、うん」

で、授業を始めたんだが・・・
さっきの黒板消しの件が気になるのか、明日菜が消しゴムをネギにぶつけたり、明日菜と委員長がまた喧嘩したり、それで授業が終わったり・・・
ま、授業とは言い難かったな

放課後――

「・・・はあ、初めての授業失敗しちゃったな・・・」

「バーカ、最初っから上手く出来る人間なんて居ねェよ」

「兄さんも失敗したの？」

「まあな、だからゆっくり慣れればいいんだよ
っと、ちょっと用事があるから行ってくるぞ」

主観　???

ネギ・スプリングフィールド・・・
奴の、千の呪文の男〈サウザンドマスター〉の息子・・・
そして・・・

「レント・スプリングフィールド」

「呼んだか？エヴァ
ったく屋上で何やってんだ？」

「ふん、貴様など呼んでいない」

「まあそう言うなって
・・・久しぶりだな」

「何故お前がここに居る
お前の修行は3年前に終わったはずだ」

「今回来たのは・・・ぶっちゃけ暇だったからだ」

相変わらずだな・・・

「それで、お前の持っている『能力〈ちから〉』のことは話したのか？」

「いや・・・まだ話してない」

あの『能力〈ちから〉』を見たときは驚いた・・・
何せ６００年近く生きてきた私が初めて見たからな・・・

「今話そうといつか話そうと、結果は変わらない
それなら早く話すべきじゃないのか？」

「わかってる！
わかってる・・・つもりだ」

変わらないな・・・3年前から
自分が楽しむことを一番に考えるお気楽思考・・・だが、心に眠る
闇も大きい・・・

「その話はいいんだ・・・
エヴァは歓迎会に行かないのか？」

「・・・あんなやかましい歓迎会に行く必要はない」
「だから・・・そう言うなって
引き摺ってでも連れてくぞ」

「お、おい手を掴むな、引き摺るな！」

こいつ・・・私の力が戻ったらどうしてやろうか・・・

主観　レント

「「「「「「「「ようこそ！ネギ（レント）先生ーッ！」」」」」」」」

教室前でネギと明日菜に会って、中に入ろうとした時クラッカーと
声が響いた

で、何故かネギがタカミチに読心術を使ってたけど・・・タカミチ
気付いてるよな？
それで明日菜が落ち込んで教室を出ていった・・・
それをネギ他数人のクラスメイトが追いかける・・・
ま、色々あったけど歓迎会も終わって夜になった

「それじゃ明日菜、木乃香
ネギを頼んだぞ」

「・・・まぁ、しょうがないわね」

「えっ・・」

「・・・・ま
さっきの言葉はちょっとぐっときたかな・・・
このままがんばれば・・
あんたもいつかはいい先生になれるかもね」

なんだかんだ言って、結構いい子だな
・・・がんばれよ、ネギ
「ハクシューン！」

「きゃ・・
またかお前はーっ！」

「ご、ごめーんっ！」

・・・先生の仕事より嘘で魔法が暴発しないようにするのが先じゃないか？

第1話　自由人の初日（後書き）

作者「どうでしたか？」

レント「・・・しずな先生が消えたな・・・」

作「君が指導教員する以上はしょうがない！」

レ「今回俺が学園長の部屋に転移したけど・・・一般人がいたらどうするんだ？」

作「それは大丈夫
原作1話の学園長室を見ると階段があります君はその先のスペースに出ます
ここなら学園長以外は死角になって見えません」

レ「宿直室ってあるのか？」

作「あれだけ大きい学校ならきっとあります！」

レ「タカミチに負けたのか？」

作「負けました、まほら武道会みたいに20カウントのルールもなかったので・・・でもいい勝負はしてました」

レ「エヴァとはいつ知り合ったんだ？」

作「君の修行の時に偶然担当したクラスに居ました
困った事があったら相談しなさいとタカミチに言われたので自分の『能力〈ちから〉』について相談しました」

レ「エヴァは怖くなかったのか？」

作「力が封印されているから大丈夫だと思ってましたエヴァンジェリンが言うようにお気楽思考なので・・・」

レ「そもそも『能力』〈ちから〉ってなに？」

作「後々説明します・・・エヴァンジェリンにだけ話したのにも理由があります」

レ「まぁ、このぐらいか？」

作「受け答えに付き合ってもらって悪かったね」

レ「ところで・・・俺のプロフィールとかは無いのか？」

作「・・・・・・」

レ「まさか・・・忘れて――」

作「で、では次回はレント・スプリングフィールド君のプロフィールです」

レ「（忘れてたのか・・・）」

作「それでは、次回も」

作・レ「お楽しみに！！」

自由人のプロフィール（前書き）

作者「どうも、樹ー打守です」

レント「レント・スプリングフィールドです」

作「では、今回はプロフィールです
物語の進行上出せないところがありますが取り敢えず・・・」

作・レ「どうぞ！」

自由人のプロフィール

名前
レント・スプリングフィールド

誕生日
５月２３日（仮）

年齢
１４歳（数えで１５歳）
つまり２―Ａ生徒と同じ
注）麻帆良来訪時

身長
１７０ｃｍ

体重
５９ｋｇ

見た目
テイルズ　オブ　ヴェスペリアのフレンを若くして、髪を黒、目を少し青みのかかった黒にした感じ（わかりにくくてすいません）
よって顔立ちは良い

得意魔法
基本的には何でも得意

得意武器
最も得意なのは銃（状況と気分で使いわける）

好きなもの（こと）
自由
睡眠
ゲーム（所持はしていない）

苦手なもの（こと）
束縛されること、すること結構辛いもの（それなりなら食べられないということはない）特技
射撃
環境への適応力の高さ（本人曰く、普段着でも砂漠や雪山で過ごせる）ｅｔｃ・・・

備考
生まれたばかりの頃に偶然ナギに拾われた。なので拾われた日を誕生日にしている
認知型の魔法能力が高い
特殊な『能力』を持っている（もう少し物語が進んだらはっきりします）
ネギ以上に頭がいい
基本的に万能

このぐらいでしょうか？

自由人のプロフィール（後書き）

作者「どうでしたか？」

レント「ま、今回のプロフィールは一部だから足りないところもあるよな」

作「そうそう、大切な設定が抜けてたよね」

レ「大切な設定？」

作「寝坊助っていう設定！」

レ「え？設定に加えられるの？本当は無かったよな？それ」

作「実は・・・寝坊助は最初は考えていませんでしたが、いつのまにかできた設定です
いい意味で裏切ってくれました」

レ「まあいいけど・・・
とにかく、話が進めばもっと細かい設定や裏設定がでるから応援よろしく！
それでは！」

作・レ「次回をお楽しみに！」

第2話　自由人と幽霊（前書き）

作者「どうも、樹ー打守です」

レント「レント・スプリングフィールドです」

作「タイトルで何となくわかってしまう今回・・・」

レ「短いけど、楽しんでくれよ？」

作・レ「それでは、どうぞ！」

第2話　自由人と幽霊

主観　レント

「・・さ・」

ん～？誰だ？

「に・さ・」

もう少し寝かせてくれよ・・・

どうせすることも無いし

「兄さん！」

「・・・ネギか？今日は何か予定でもあったっけ？

俺が起きるのが遅いのはいつものことだろ？」

「に、兄さん・・・ここはウェールズじゃないよ」

ん？ああ、そういえば麻帆良学園に来てたな

「で？今何時だ？」

時計を見ると・・・ＳＨＲ開始１０分前・・・

「また遅刻かァァァ！！」

麻帆良学園に一つの叫びが響いた――

「「「「「「先生、おはようございます！」」」」」」

「はい、おはよう」「おはようございます、皆さん」

「・・・レント先生、寝癖ひどいですよ？」

直す時間がなかったんだよ朝倉・・・

因みに、明日菜や木乃香は名前だったが何故朝倉は名字なのかというと・・・ぶっちゃけなんとなく

名字か名前の呼びやすい方で呼び捨てにすることにした

つまり、深い意味は無い

「まぁ、気にしないでくれ」

そんな感じでＳＨＲも終わって１時間目・・・

英文の日本語訳を明日菜がすることになったんだが・・・

「ジェイソンが・・花の上・・に落ち春が来た？

ジェイソンとその花は・・

えと・・・・高い木で食べたブランチで・・・・骨・・が百本？

えーと・・・・骨が・・・・木の・・・・

・・・・・・・・」

「――アスナさん英語ダメなんですねえ」

「なっ！？」

おいおい・・・ネギ・・・

「アスナは英語だけじゃなくて数字もダメですけど」

「国語も・・」

「理科社会もネ」

「要するにバカなんですわ
いいのは保険体育くらいで」

で、ネギに掴みかかる明日菜・・・まあネギが悪いな
ってネギが嘘を・・・止めないとまずいよな

「ハクション！！」「（レジスト！）」

ふう、成功っと
さて・・・

「とうっ」

「痛ッ！」

軽くネギを小突く

「頑張ってる生徒相手に『ダメ』はないだろ
どの単語を間違えてたのかも大体わかったし、前半はまあまあ出来

てたからな
何より、諦めないで考えていたからな（あと魔法を暴発させるな！）
」
最後のは念話で伝えたぞ
「う、アスナさん、ごめんなさい・・・（兄さんも・・・ごめんなさい・・・）」
「ま、まあいいわよ
私が勉強できないのは事実だから・・・」
「ほら、ネギ先生は日本語訳のコツでも教えたらどうだ？」
「う、うん！
えーっとこの文は・・・」
黒板にコツを書くネギ・・・
ま、ダメとかの否定的な言葉を使うのはよくないよな～
――放課後
さて、じゃあ少し動きますか！
主観　？？？
ふう・・・新しい先生が二人も来たのに・・・また気付いてもらえませんでした・・・
やっぱり私はダメ幽霊で――

「さよ」

「えっ？」

今・・・呼ばれたような・・・

「えっ？ってさよは一人だろ？」

「いえ、あの、その・・・

わ、私が見えるんですか？」

「見えるも何も・・・そこにいるだろ？」

わ、私のことを見れる人が・・・うぅ

「えっ！？何で泣いてんだ！？な、何か俺悪いこと言ったか？

あ～・・・泣き止んでくれよ・・・」

「かな、悲しいわけじゃないんです、ふえええええっ」

「だ、だから泣くなって～」

「落ち着いたか？」

「ぐす・・・はい」

「しかし・・・驚いた、幽霊だったなんてな・・・

制服が違うし、誰も声をかけないから不思議に思ってたけどな～」

「私はレント先生が私の姿を見れたことに吃驚しました・・・」
この６０年の間誰にも気付かれませんでしたから・・・
「まぁ、幽霊なら気にすることはないか」
「？
何がですか？」
「いや、魔法って信じるか？」
魔法？
「それって何もないところから火を出したりするあの魔法ですか？」
「そう、その魔法」
「私にはわかりませんが幽霊〈わたし〉も居ますし・・・あっても
おかしくないんじゃないでしょうか？」
「その通り、本当にあるんだよ
えーと杖は・・・あった
プラクテ・ビギ・ナル　火よ灯れ」
「わぁ～！小さい火が出てきました！」
「これが初心者用の魔法だ
まあ、そんなわけで・・・魔法は現実にあるんだよ」

魔法は本当にあったんですね～・・・でも

「どうして、私に魔法について教えてくれたんですか？」

「ん？ああ、初めて俺達が教室に来たときネギが罠をかけられただろ？
その時に魔法で黒板消しが浮いたのを見て、かわった表情をしてたクラスメイトのとこをまわってんだよ（まだ一人目だけど）」

そうだったんですか・・・あれ？ということは

「ネギ先生と２－Ａのかわった表情をした人も魔法使いなんですか？」

「そうだな、少なくともネギがこの麻帆良学園に来たのは魔法使いの修行だからだ
２－Ａの生徒はこれから確かめる」
自分たちのクラスに魔法使いが・・・何だかすごいですね

「さてと、そろそろ他の人のところに行ってくるか」

あ・・・レント先生が・・・
ゆ、勇気を出さないと

「レント先生！」

「ん？どうした？」

頑張れ！私！

「その・・・私と友達になってください！」

い、言えました！

「俺、一応先生なんだけどな・・・

まぁ、俺なんかでいいなら喜んで」

「あ、ありがとうございます！」

やっと、やっと友達ができました！

「じゃあ、他の生徒のとこに行ってくるな」

「はい、気をつけてください」

レント先生が行ってしまいました・・・

レント先生・・・

第2話　自由人と幽霊（後書き）

作「どうでしたか？」

レ「それじゃあ、受け答えに入りますか」

作「あ、今回は君が答えてね」

レ「何故？」

作「いや、君がやったことに君が質問するのは何か変な気がして・・・」

レ「（作者が質問するのも変だと思うけどな）」

作「まあ、始めようか」

作「何でさよが見えたの？」

レ「認知型の魔法能力〈ＥＳＰ〉が高いからだな」

作「ネギと君が入ってきたときはどんな表情だった？」

レ「ん～・・・期待？気付いてほしかったんだな」

作「魔法について話していいの？」

レ「まぁ、大丈夫だろ・・・多分」

作「もし、さよが魔法関係者じゃない普通の人だったらどうしてた？」

レ「記憶を消してた
困るので」

作「始動キー　はプラクテ・ビギ・ナルでいいの？」

レ「いや・・・ネギの　ラス・テル・マ・スキル・マギステルでも
13文字、プラクテ・ビギ・ナルなら8文字ですむからいいだろ？」

作「これってフラグ？」

レ「さあ？・・・あんたが聞くか？」

作「このぐらいかな？」

レ「・・・なあ」

作「ん？」

レ「いつになったら戦闘に入るんだ？」

作「さあ？」

レ「無責任すぎるだろ！！
ここんとこ日常ばっかだぞ！！」

作「まあまあ、一応は考えてるから」

レ「一応かよ・・・

まあいいか、では次回も」

作・レ「お楽しみに！」

第3話　自由人と違法薬品（前書き）

作者「どうも、作者の樹ー打守です」

レント「レント・スプリングフィールドです」

作「今回はいつも以上に短いです」

レ「ってかタイトルが凄いことになってるけど」

作「まあまあ、気にしない気にしない
それでは！」

作・レ「どうぞ！」

第3話　自由人と違法薬品

主観　レント

さよと話してきた屋上（教室で話すわけにいかないからな）から教室に戻ってきたけど・・・なんか騒がしいな？

「明日菜、何かあったのか？」

「あ、レント・・・先生」

なんか・・・違和感がするな

「別に先生をつけなくてもいいぞ、同年代にそういう言葉遣いするの苦手なんだろ？」

「え？でも・・・」

「まあ、必要なことなのはわかるが・・・時と場合でちゃんと使い分けられるなら別にいいからな」

「・・・うん、わかった！
ってそれよりもネギが！」

ネギが？
・・・要約すると、ネギが明日菜に作ったホレ薬（飲んだ人に周りの人から好意が向く）をネギに飲ませたところ何故か明日菜には効かなかったが何人かの生徒がネギを追って行ったと・・・
ん？あれ？

「ホレ薬ってことは・・・もしかして魔法を知ってるのか！？」

一応他の生徒に聞こえないようにしたぞ

「（み、耳打ちしないでっ顔が近いっ～！）

う、うん・・・二人が来た日に知ったから」

なるほど・・・でも何でネギは記憶を消さなかったんだ？

まあ、ネギも頭が悪いわけじゃないからな・・・理由があるのか？

「詳しいことは後でネギも含めて聞くか

なら、ネギを探しに行くか！」

っていっても探知魔法を使うんだけどな

「ん～・・・こっちだな！

行くぞ、明日菜」

「わかった！でも・・・あってるの？」

「大丈夫だよ、ネギみたいに魔力が多い分探知もしやすいからな

・・・あと、魔法のことは話すなよ？」

「わかってる

バレたらネギがオコジョにされるんでしょ？」

他にもあるんだけどな、仮免許の没収とか

で、廊下を走ってるわけなんだが・・・

「・・・そーいえば朝はありがとね」

「ん？何のことだ？」

俺何かしたか？

「ほら、英語の授業の時に私のこと褒めてくれたでしょ？
私バカで・・・勉強してて褒められることなんてなかったから・・・
」

「そのことか・・・別にいいんだよ、頑張ってたのは事実だろ？
・・・勉強不足も事実だけどな」

「う・・・わ、わかってるけど・・・」

「まあ、授業でわからないことがあったら俺かネギに聞いてくれ」

「わかった、そうする」

「ネギせんせー」

・・・今のは？

「今のは本屋ちゃんの声！？」

「本屋ちゃん？」

「あ～ほら、出席番号２７番、宮崎のどかよ！」

ああ・・・そういえば名簿に図書委員って書いてあったな・・・だから本屋？

「・・・たしかにこっちから魔力を感じるな」

「この扉の中？」

「そうだな、入るぞ」

明日菜が開けようとしたんだが・・・

「げ、何よコレ
カギがかかってる」

・・・どうやって開けるかな・・・

「どいて！レント！」

「・・・どうするつもりだ？」

「こうするのよ！
こーのネギ坊主・・・・
何をやっとるかー！！」

見事な回し蹴りを扉に決める・・・・って

「おい！？危ないだろ！？」

「わーーっ！」「あうっ」

ネギが魔法を使って飛んだ扉を防いだ・・・危なっ！

「ア、アスナさん！！兄さんまで！！」

「あ、本屋ちゃん！

・・・・じゃなくて宮崎まで

ゴ、ゴメン！」

「大丈夫みたいだな、ネギ」

「全く・・・・世話がやけるわね！」

のどかを抱える明日菜・・・よく軽々と抱えるな・・・のどかの体重が重いってわけじゃないけどな

「あ、ありがとうございます、アスナさん！

助かりました・・・・」

さて・・・と

「ネギ・・・何で明日菜に魔法を知られてるんだ？」

「あ・・・ごめんなさい・・・実は・・・」

つまり・・・のどかを助けるために魔法を使ったところを明日菜に見られたと・・・

「記憶を消さなかったのか？」

「け、消そうとしたんですが何故かパ「それから先は言うな！ネギ坊主！」・・・とにかく失敗しました・・・」

「まあ、もう関わっているのに消す必要もないか」

それでっと・・・

「ネギ、ホレ薬のことなんだが・・・」

「どうしたの？兄さん？」

真面目なネギが何も言わないってことは・・・

「ネギ・・・ホレ薬は違法な魔法薬品だ」

「・・・え？」

やっぱり知らなかったか・・・

「ええ～っ！！

も、もしかして僕悪いことしてた！？」

「まあ、それほど強力なホレ薬でもなかったし大丈夫大丈夫実際被害もなかったんだろ？」

「う、うん・・・」

「ま、もうこんなことすんなよ？」

「わかった！」

ふう・・・ってあれ？

今日は魔法に関係してるっぽい人に話を聞くつもりだったんだけど・・・一人（幽霊って数えるとき人でいいのか？）しか聞いてない？

まあいいや・・・帰って寝よう

第3話　自由人と違法薬品（後書き）

作者「どうでしたか？」
レント「・・・で？また受け答えするのか？」

作「まあ、そうですね」

レ「じゃあ始めようか」

作「さよと話してたときは屋上にいたの？」

レ「そうだな、一般生徒もいたから移動したってこれはあんたが書き忘れてたんだろ？」

作「あはは・・・はい、すいません・・・質問することが少ないね」

レ「まぁ文章も短いからしょうがないんじゃないか？」

作「う、すいません・・・長い文章書けないんですよ！」

レ「出来る限りでいいからもう少し長い文章を書こうな？」

作「・・・善処します
そ、それでは次回も！」

レ「（無理矢理締めた・・・）」

作・レ「お楽しみに！」

第４話　自由人と吸血鬼（前書き）

作者「どうも樹ー打守です」

レント「レント・スプリングフィールドです」

作「タイトルから察する通りあの人です」

レ「その割に出番が少ないよな」

作「まあ色々と細かい事情があるので・・・取り敢えず！」

作・レ「どうぞ！」

第４話　自由人と吸血鬼

主観　レント

ん～？朝か・・・時間は６時
珍しいな俺がひとりで早起きするのは・・・
何か寒気がするけど風邪か？

「あの～レント先生」

「うを！！
ってさよか・・・何で俺の部屋（宿直室）に？」

「その・・・夜の学校は何か出そうで怖すぎなので・・・友達が近くに居ると安心できると思って・・・」

幽霊（おまえ）がそれを言うのか？・・・取り敢えず寒気の原因はこれか

「まあ、それはいいけど・・・今までどうしてたんだ？」

「あ、私地縛霊ですけど学校の近くなら出歩けるんです、だから近くのファミレスやコンビニに行ってました」

「本当に幽霊なのか？」

世の中の幽霊が全部さよみたいだったら悪霊被害もないだろうな

で、しばらく話していたんだが・・・

「さて、そろそろ学校だな」

「もうそんな時間ですか・・・」

落ち込むさよ・・・まあ、６０年見てるだけだったから長く話したいんだろうな・・・

「ほら、そんな顔するなって、また話し相手になるさ・・・友達だからな」

「は、はい！」

笑顔になったな・・・幽霊でもなんでも笑ってたほうがいいよな

「じゃ、教室に行くか」

準備をしてたらノック音がした・・・ネギか？

「兄さーん入るよ？」

ネギが入って来たんだが・・・何故か明日菜と木乃香まで？

「兄さんが自分で起きてる・・・」

おい、そこまで驚いた顔をするか？・・・珍しいことは自覚してるけど

「たまにはそんな日もあるだろ・・・

で？なんで明日菜に木乃香まで？」

「あんたが朝起きないってネギが言ったから起こしに来たのよ」

「ネギ君も苦労しとるんよ？」

「なるほど

ま、今日は大丈夫だよ。　じゃあ教室にいくか」

ＳＨＲも終わって英語の授業・・・

「じゃあ今のところを訳してもらいます

え～～と・・・・・・

じゃあ朝元気に挨拶してくれた佐々木さん！」

「えーーネギ君ひどいー挨拶して損したーーっ！」

「ネギ先生訳なら私が・・・・！」

「いいんちょハーフだからだめーずるいー」

「なっ・・・・ハーフじゃありませんわよ！」

笑い声が響く教室・・・でも授業もちゃんと進んでるな

ネギも先生らしくなってきたんじゃないか？

学園長室――――

「そうか、なかなかうまくやっとるのかネギ君は」
「はい、がんばっています
正式な教員にしても大丈夫だと思いますよ」
「フォフォ、そうか、けっこうけっこう
では４月からは正式な教員として採用できるかのう
ご苦労じゃったレント君」
「いえ、それにまだ課題があるんでしょう？」
「フォフォ察しがいいの
彼にはもう一つ課題をクリアしてもらおうかの
才能ある立派な魔法使い〈マギステル・マギ〉の候補生として――」

「いたいた、ネギ！」
「あ、はい！？
兄さん？」
「学園長から最終課題だってさ」
「えっ！？僕への最終課題！？」
さて、どんな課題かな？
・・・期末で最下位脱出？

「な・・なーんだ簡単そうだねー！びっくりしたー！」

「まあ、そうだな
最下位から二番目でもいいってことだ」

「え～！？なになに！？どーしたのネギ君、レント先生ー？」

出席番号１７番椎名桜子と出席番号２番明石裕奈か・・・椎名と裕奈だな

「あーー！ネギ君本物の先生になるんだ！？」

「へーなになに・・？」

「あっ！見ちゃダメですよう！」

ま、何とかなるだろ

「ネギ、ちょっと用事があるから一人でやっといてくれ」

「え？・・・うん、わかった！」

さて、屋上に行きますか！

主観　エヴァンジェリン

ふう、昼は眠い・・・

「おーい！エヴァ！」

またか・・・

「何の用だレント」

「いい知らせを持ってきたんだよ」

「いい知らせだと？」

「学園結界の外に出る方法だよ」

「何！？学園結界を解く方法を見つけたのか！？」

「ちょっと待てって、俺が見つけたのは麻帆良から外に出る方法だ、
力は封じ込められたままになる
その上、出られる時間も5日ぐらいだけどな」

「それだけか・・・それならサウザンドマスターの息子の血を吸ったほうが早い」

「それはダメだって
『登校地獄』が解けるまで血を吸ったらネギが倒れるだけじゃすまなくなる」

「それなら早く解く方法を見つけることだな」

「それができたら苦労してないってのの
まあ、取り敢えずそれだけだ仕込みにも時間がかかるから頻繁には使えないけどそういうのもあるって覚えといてくれ」

「用が済んだのなら早く教室に戻れ」

「何言ってんだよエヴァも一緒に行くぞ」

「だから引き摺るな！無理矢理連れて行くな！」

何故かこいつとは遠い昔に会ったことがあるような気がする・・・
６００年も生きていれば似たような奴にも会うか・・・誰に似ているんだろうな

第４話　自由人と吸血鬼（後書き）

作「どうでしたか？」

レ「・・・何か伏線の張りかたが――」

作「わかってる！下手なのはわかってる！
エヴァンジェリンを動かすの難しいんですよ！？
・・・いや本当に文章力の無さを感じました・・・読者の皆様温かく見守ってください・・・」

レ「じゃあ・・・質問にいくか」

作「ドッジボールの話は？」

レ「省略！」

作「何故エヴァンジェリンは君のことをフルネームで呼ばない？」

レ「・・・ま、色々あったからということで」

作「エヴァンジェリンを麻帆良の外でも行動させる？」

レ「俺の修行中に登校地獄を解く方法を探せって頼まれ（脅迫）されたから探してたんだよ成功すればネギも血吸われないだろ？」

作「どんな方法？」

レ「後々・・・」

作「麻帆良の外に出していいの？」

レ「まあそんな悪いことはしないと思ってるから」

作「案外仲がいい？」

レ「どうだろう・・・俺はそんなに悪印象はないけど」

作「このぐらいかな？
それでは、次回も！」

作・レ「お楽しみに！」

以下作者のつまらない話

今日はＴＯＡ（３ＤＳ）の発売日でした・・・予約して買いましたよ？本体もないのに・・・
早くＴＯＸが早く出ないかな～と思っています
かな～り楽しみです・・・まだまだ先ですが・・・

では失礼しました

第４．５話　吸血鬼の追想（前書き）

作者「どうも、作者の樹ー打守です」

レント「レント・スプリングフィールドです」

作「今回はタイトルの通りエヴァンジェリンが主役です」

レ「俺は？」

作「今回は出番無し！」

レ「えぇ～・・・」

作「まあとにかく」

作・レ「どうぞ！」

第4．5話　吸血鬼の追想

主観　エヴァンジェリン

「探せ！絶対に近くにいるはずだ！」

クッ・・・いくら真祖でもまだ吸血鬼らしい弱点があるのか・・・

急いでここから離れ――

「死ねぇ！化け物！」

突然後ろから巨大な剣を持った男が現れそれを振り下ろした

だが、それは私には届かなかった

「大丈夫か？」

見上げるとそこには一人の男が振り下ろされた巨大な剣を片手に持った剣で防いでいた

「なっ・・・誰だ貴様は！」

「誰でも・・・いいだろっ！」

そう言って相手を蹴る男・・・相手は気絶した

「よし、逃げるか」

「なっ、手を掴むな！連れて行くな！」

「・・・追っ手は来ないみたいだな」

「・・・何故助けた？」

私を助けても何一つ得は無かったはず・・・いや、寧ろ損しかない

「ん～・・・何となくだな
ま、気にしないでくれ」

何となく？
そんな理由で助けたのか？

「そんなことをしても何の得にもならないはずだ」

「・・・それでいいんだよ
人生を楽しむコツは損得で物事を考えないことだからな
お前もそうすればわかるさ」

人生か・・・

「私は人じゃない、真祖の吸血鬼〈ハイ・デライトウォーカー〉だ。
人の生とは無縁の存在なんだよ」

「いーや、違うな
そうやって苦しんで、悩んで、考えてるのは人の心を持ってるからだ

姿形は関係ない」
私が人の心を・・・？

「・・・なあ、しばらく一緒に旅してみないか？
そうすれば何かわかるかもしれないだろ？」

「何？」

正直なところ、嬉しかった一人は寂しかったから・・・

「・・・わかった、少しの間だけ一緒にいてやる」

「よし！なら自己紹介だな
俺は――」

・・・それからしばらくはそいつと一緒に旅をした
だが――

ある日、野営をしていて目が覚めた時だった
あいつが誰かと闘っていた

「おい――「来るなっ！」」

鬼気迫る声で言われ動けなかった・・・
その後あいつは敵を退けた・・・が

「・・・お別れ・・・みたいだな・・・」

「な・・・どういうことだ!?」

「・・・俺にも事情があってな・・・」

もう一人になるのはイヤだった・・・

「ダメだ!お前は私と一緒に旅を続けるはずだろう!」

「・・・それは出来ないんだ・・・」

そんな・・・

「俺のことは記憶から消しておく
・・・大丈夫、またいつか会えるさ
取り敢えず・・・さよならだ」

「待てっ!」

「どうかしたのですか?　マスター」

茶々丸・・・ここは私の家か・・・

「いや、なんでもない

昔のことを夢に見ただけだ」

そうか・・・すっかり忘れていた・・・

記憶を消されたからか、あいつと何をしたのかは覚えているが、名前と姿が思い出せない・・・消すなら全部消してくれれば・・・

いつか、会えると言っていたのにな・・・あいつが生きているはずがない・・・

「マスター？」

「・・・もう一度寝る」

あいつもナギも・・・嘘つきばかりだ・・・

第４．５話　吸血鬼の追想（後書き）

作「どうでしたか？」

レ「俺に似た・・・誰だろうな？」

作「まあそれも後々・・・」

レ「・・・後々が多くないか？」

作「・・・すいません」

レ「ま、それはいいか
それでは次回も！」

作・レ「お楽しみに！」

第5話　自由人と図書館島（前書き）

作「作者の樹ー打守です・・・取り敢えずすいません！」

レ「また突然だな・・・」

作「二日前には投稿する予定だったのですが・・・」

レ「結局遅れてこの時間と」

作「うっ・・・」

――作者残りＨＰ１０――

作「ま、まあ今回はそのおかげでちょっと長いから・・・」

レ「長いって言っても他の作者様に比べたら短いぐらいじゃないのか？」

作「ぐぅっ！」

――作者残りＨＰ５――

作「い、いやまあ自分なりのペースで進めば・・・」

レ「そんなこと言ってるから感想もこないんじゃないか？」

作「ぐあぁああ！」

――作者残りＨＰ０――

作「・・・この小説を楽しみにしている人のためにも頑張ります・・・」

レ「・・・そんな人いるのか？」

作「ギャアあアァあ！？・・・ガバッ」

――作者オーバーキル――

レ「あ～、ちょっと悪ふざけが過ぎたか？
読者の皆様、後書きまでには治しておくので・・・
取り敢えずどうぞ！」

第5話　自由人と図書館島

主観　レント

「――という人がいたんです」

「それは・・・凄い生徒がいたんだな」

今は夜・・・そろそろ寝たいんだが・・・

「それにそのクラスには――――」

・・・さよの話が長いな

話したいことが６０年分って考えたらこのぐらいなのか？

「あ～・・・そろそろ眠いから続きはまた今度でいいか？」

「え・・・す、すいません！

つい話し込んでしまって・・・」

「そんなに謝るなって

それじゃ、おやすみ」

おやすみって言ったけど幽霊は寝るのか？

「はい、おやすみなさい」

さよが出ていったが・・・何とかしてクラスの皆と話せるようになれないかな・・・

俺だけじゃなく色々な人と話したほうがいいと思うんだが
まあ考えておくかな
そろそろ寝よう・・・

「レント先生！
ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に・・・！！」

・・・どこから話を聞こうか・・・

「早乙女、のどか、何故こんな時間にここへ？」

「む？なんで私は名字なのにのどかは名前で・・・？
まさかレント先生は・・・」

何でそうなるんだ？

「呼び方については期待しているようなことはないと思うぞ？
呼びやすいのが名前か名字かで決めているからな」

「正直に言ってもいいんだよ？レント先生」

「正直に言ってるよ・・・
のどか、何があったんだ？」

「え、ええとー・・・そのー」

・・・図書館島にある読むだけで頭が良くなる魔法の本（二人は参考書だと思っている）を取りに行くためにバカレンジャー・・・成績の良くない夕映、明日菜、古菲（古菲の呼び方は古菲で固定）、まき絵、楓（何故に皆出席番号が４の倍数？）＋図書館探検部の木

乃香＋ネギで地下まで行ったが突然連絡が途絶えた・・・

「なるほどな
それで救出に行くと・・・
先生だからってのもあるだろうけど何で俺なんだ？」

「明日菜とネギ先生が何かあったらレント先生を呼んでくれって言ってたから」

魔法を知ってるからな・・・しょうがない助けに行きますか！
図書館島は初めてだな・・・少し楽しみだ

「わかった、準備が整ったら行こう・・・っと」

「大丈夫ですかせんせー、少しふらついていますよ？」

「いや眠気が・・・ここは最終兵器に頼るか
えーっと冷蔵庫の中に・・・」

「「（（最終兵器？））」」

えーっと冷蔵庫っと
あったあった数は・・・４本か充分だな

「・・・先生それは？」

「見ての通り眠〇打破だけど？」

「「（（最終兵器ってそれー！？））」」

一本あれば3時間は大丈夫か？半日はいけるな

「あとは何がいるかな～？」

――――30分後

「準備完了！行くか！」

「私達二人も行きます！
先生だけじゃ道がわからないでしょ？」

ん～どうしようか・・・

「いや、地図もあるから大丈夫だ自分の勉強をしておいてくれ
誰かに会ったら連絡はするよ」

「で、でも図書館島の地下には危険な罠もありますよー」

「大丈夫だって俺は無事に戻ってくるし、ネギもちゃんと連れてくるよ」

「えっ！？・・・あ、はいー」

・・・確信　のどかはネギに好意を持ってるな
さっき話をしてた時もネギの話が出てきた時は反応が大きかったから
まさかとは思ったが・・・
まぁ、俺が口を出すことじゃないか

「じゃあ行ってくるよ」

――で、図書館島

さすがに眠〇打破は効くな～

・・・ここの裏手に秘密の入り口があるって言ってたな

「あ～、こちらレント地下3階に到着しました
どうぞ」

「了解
がんばってネ、先生」

たしか・・・本棚の上を歩くって言ってたな

・・・なんか見え見えの罠があるけど多分上に乗ったら下が開いて
落ちるんだろうな・・・

まあこれには引っ掛からないよな

カチンッ

ん？何か踏んだけど・・・まさか・・・

ガコン

上か？って本棚が倒れてきたぞ！？

魔法を使い止めて、元に戻す・・・図書館なのに本を罠に使うのは
いいのか？

「こちらのどかですー
その先に休める所があるのでそろそろ休憩してくださいー」

「いや、まだ大丈夫だ
少しでも早く救出に向かう」

ネギとは違う魔法の気配がする・・・急いだほうがいいかもしれないな

何で湖があるんだ？本に水ってダメだろ

本棚の壁か？これは
ざっと６０・・・７０メートルか・・・ちょろいな！

・・・随分狭い所を通るんだな、匍匐前進でギリギリか・・・
ん？上が開いてるってことはここに行ったのか？

広い部屋に出たが・・・所々壊れてるのは何故？
しかも穴の下からネギの魔力を感じるんだが・・・行くしかないか！

かなり落ちたな・・・下は水だったが一般人のメンバーは大丈夫なのか？

お、皆居るな全員目立った傷はないが・・・明日菜が肩を怪我してるな・・・治癒魔法をかけておくか

「プラクテ・ビギ・ナル　『汝が為にユピテル王の恩寵あれ　治癒』」

さて・・・

「こちらレント、全員の無事を確認した・・・が直ぐには帰れそうにないので俺はここで待機する」

「了解！」

妙な魔力は近くから感じるな・・・誰かが目を覚ますまで起きてないといけないのか？

主観　明日菜

「あれ・・？ここ・・どこ？」

私・・・何でこんなところに？

「・・そ、そうだ
僕たち英単語のトラップを間違えてゴーレムに落とされちゃったんだ・・・・」

「・・・ようやく・・・起きたか」

この声は・・・

7人が声の聞こえたほうを見ると

「「「「「「「レント先生（兄さん）！？」」」」」」」

な、何でレントがここに？

「・・・話は後でいいか？
取り敢えず・・・寝かせて・く・・・・れ」

レントが地面に倒れこんだ・・・眠ってるみたい

「何故レント先生がここにいるのでござるか？」

「レント先生一人で地下道を抜けたんかな？」

「それにここはどこアルか？」

「ここって図書館の地下なの・・？」

「こ・・・・ここは幻の『地底図書室』！？」

あの図書館の地下みたいだけど・・・上に行く手段もないみたい
ネギも魔法が使えないし・・・

「み、皆さん元気を出してくださいっ！
根拠はないけど、きっとすぐ帰れますよっ！
あきらめないで期末に向けて勉強しておきましょう！」

「「「「「え・・・・べ・・勉強～～！？」」」」」

ネ、ネギ！？

「プッ・・アハハハ
この状況で勉強アルカー！？」

「ハ、ハイ！きっとすぐに出られますから」

「何かネギ君楽観的で頼りになるトコあるなー」

「・・ありがとうネギ君
ホントは私　（とアスナ）のせいでこんなひどいことになったのに・・・・」

うっ・・・私にも責任があるわね・・・

「そんなことないですよ！！
魔法の本がなくても今からがんばれば大丈夫！！」

「そうでござるな、今から勉強すれば・・」
「月曜のテストまでに１０点ＵＰくらいはネ」
「う、うん！」
「そうだね！」
ありがとね、ネギ
「幸いなことに教科書には困らないようですし・・・・」
「あ、数学のテキストあったえ」
「よーし！
じゃあ早速授業を・・・・！」
ぐぎゅる～っ
・・・そういえば昨日のお弁当からなんにも食べてなかったわね・・
・
「・・・・とその前に」
「「「「食料探しだーっ！」」」」
どんな食べ物があるかなー？

主観　レント

――先生、先生！――

――そん・・な顔は・・するな

お前の・・・責任じゃ・・ないさ――

――でも・・・・！――

――そう・・だな・・・悪いと・・思うなら――

「・・・ん」

また・・・あの時の夢か

・・・最近は見ることが増えたな・・・

「あ、みんな！レントが起きたよ！」

明日菜？ここは・・・図書館の地下だったか？

「レント先生、大丈夫なん？」

「拙者達を助けにきてくれたでござるか？」

「先生は一人であの道を抜けたですか？」

「・・・質問は一人ずつにしてくれないか？」

状況整理――

「つまり、期末テストで最下位になるとクラス解散、さらに小学校からやり直しになる
それを回避するために本を取りに来た　　が、本を手に入れることはできなかった
その上戻れなくなったと・・・
間違いないな？」

頷く6人、戸惑うネギ・・・そりゃ戸惑うよな

「「どういうことだ（ですか）？」」

「「「「「「え？」」」」」」

「・・・小学校とかクラス解散なんて話は聞いてないよな、ネギ？」

「た、たぶん・・・」

「「「「「「えぇ～！！」」」」」」

・・・普通はそんな話は信じないと思うけどな・・・

「まぁこのテストで最下位になるとネギがクビだけどな」

「え・・・ネギ君、この学校の先生やめちゃうの？」

「い、いえ・・・テストで最下位にならなければ・・・」

「ほかほか、ならがんばらんとあかんな」

「ネギ坊主のためにも勉強するアルよ！」

「皆さん・・・ありがとうございます！」

ここにはテキストもある、問題ないな

「じゃ、授業を始めますか！」

翌日（テストまであと一日）――

授業はネギに任せて探索と水浴び中

２－Ａ生徒と会うなんて展開には期待しないように！

・・・滝の裏に非常口があった・・・ここから外に出られるな

「キ、キャー！」

今のはまき絵の声・・・出たか！

「で、出口は見つからんと言うとるじゃろーが

あきらめて捕まるのじゃー」

・・・ゴーレム？いや、この感じは・・・

「皆！こっちの滝の裏側に非常口がある！」

問題付きでな

「兄さん！？」

「早く行ってくれ、殿は俺がやるから」

「・・・しんがり？」

明日菜・・・そこはわかってくれ・・・

「このゴーレムは俺が止めておくから逃げろってことだよ」

「ちょ、ちょっと、そんなことしたらレントが危ないじゃない」

心配か？それは嬉しいけど・・・

「大丈夫だよ、先に行っててくれ
俺も後から追い付くからな、絶対に」

「でも！」

「いいから行ってくれって」「・・・わかったわよ・・・でも、絶対に来なさいよ！」

「了解、了解」

・・・扉を開く鍵になっていた問題を古菲が解いて先に進む全員

・・・さてと

「何をしているんですか、学園長？」

「フォッ！？

な、何のことじゃ？」

動揺しすぎじゃないか？

「何故そんなゴーレムに化けてこんなところに居るのかと聞いているんですよ」

「・・・フォフォフォ。　ばれているならしょうがないのう」

いや・・・見た目はゴーレム魔力はじいさんって感じだけどな・・・

「ネギの様子を見ていたんですか？」

「そうじゃ、ネギ君がこの学校でやっていけるか見たくてのう」

やっぱりか・・・

ま、別にいいけどな

「それじゃ、行きますよ」

「フォフォフォ、儂も後から行こうかの」

約束通り追い付きますか！

「・・・で？何故服を脱いでエレベーターに？」
作業用のエレベーターがあったが・・・
「じ、重量オーバーで上まで行けないのよ！」
それで脱いだってことか・・・
どうするかな・・・
「明日菜、少し来てくれ」
「いいけど・・・何で？」
「全員の服を渡してくれ
その・・・下着もあるし・・・・な」
さすがに抵抗があるだろ・・・
「渡したけど・・・どうするの？」
「明日菜はここで俺と待機
他のメンバーはエレベーターで上に行く、その後俺達も脱出
ってのはどうだ？」

「それなら僕が残ります
アスナさんを危険な目にあわせるわけにはいきませんから」
「大丈夫だって、ゴーレムがきても守るさ」
「でも一人で守るのは・・・」
多分明日菜一人でも大丈夫なぐらいだと思うが・・・あのゴーレムは学園長だから
知らないからその反応が当然だとは思うけどな
「ネギ、２－Ａの生徒は明日菜だけじゃないだろ？
全員を安全に返すためにも先に行ってくれ」
ま、そんな危険も無いとは思うが・・・一応な
「・・・わかりました、でも二人ともちゃんと帰って来てくださいよ？」
「レント、何で私だけ残したの？」
「何でって・・・生徒の中で唯一魔法を知ってるからだけど」
・・・何でそんな怒ったような悲しいような顔をするんだ？
「別にいいけど・・・でも、本当にあいつが来たらどうするの？」
「まあ、その時はその時だな
それに、さすがにそんな早くここには来れないだ――」

――それでも居るのが『ご都合主義』の世界の宿命――

「フォフォフォ、追いつめたぞよー
覚悟するのじゃー」

「「（（何でいるんだー！？／何でいるのよー！？））」」

二人は心の中で同時に突っ込んだ

「おいおい・・・近付く気配も何もしなかったんだけどな」

「ね、ねぇこれって・・・
もしかしてピンチ？」

「ああ、もしかしなくてもピンチだな（端から見れば）」

俺はゴーレムの正体を知ってるからな
・・・学園長は魔法書があればいいんだよな
それなら・・・

「明日菜、魔法の本を貸してくれ」

「え？あ、うん
どうするの？」

「まあ見てろって」

魔法書を大きく振りかぶって思う・・・

「（すみません学園長・・・全力で投げます
手加減したら不自然ですよね？
当たりどころが悪くても怨まないでください・・・
最後に一言・・・本当にすみません！！）」

以上、約０．７秒――

「そぉおおおお――」

「ち、ちょっとそれは――」

「れぇええい！！」――全力投球（球じゃなくて本か？）した本は頭部っぽいところに当たった
すごい勢いで落ちたけど・・・
学園長・・・小言はあとで聞きます
もし、もしも、万が一、御臨終したのなら・・・葬儀は盛大にします・・・

ま、そんなことは億が一、いや兆に一も無いか
西の長でもあるから大丈夫だよな？

「レント・・・本が・・・」

「大丈夫だろ？」

「でもあの本のおかげで階段の途中の問題も――」

「『大化の改新で重要な役割を果たし藤原氏の祖となった人物は？』制限時間は１０秒だ」

「え？えっと・・・『中臣鎌足』？」

「正解

な　本が無くても答えられただろ？

みんなが問題に答えられたのも本の力じゃなくて自分の力だよ」

「そうだったんだ・・・」

その時ちょうどエレベーターが戻ってきた

「じゃ、上に戻るか」

「・・・うん！」

――結局本も落としてしまったということで多少責められたが・・・

「やっぱり自分達の力で最下位脱出を目指そう！」

という明日菜の言葉のおかげで全員勉強中――

俺はというと・・・

「まったく・・・ゴーレムが儂だと知りながら全力で本を投げるとは何事じゃ！」

・・・学園長による説教中

「む、聞いておるかの？」

「・・・すいませんでした」

学園長は見事に御臨終・・・とはいかずに軽傷ですんでいた

まぁ、悪いとは思ってるけど・・・

「大体お主は・・・」

そんな感じで説教はテスト時間のほぼ全部を使って行われた・・・

正直かなり辛い

で、テストの順位発表・・・

『次は下から2番目・・・・ブービー賞です』

２―Ａはまだ出てない・・・つまりここで２―Ａじゃなければ・・・

『えーと・・・・これは・・・・・

２―Ｋですね平均点６９．５』

・・・凍てつく波動が拡がった気がした・・・いや、本当に拡がった・・・

「「「「「「「「最下位・・・確定〜〜〜！？」」」」」」」」

みんなが固まっている間にネギが部屋を出ていった・・・

追いかけるか

ネギを追いかけている途中に学園長に会った

「レント君」

「何ですか？急いでますから、説教の続きは後でいいですか？」

「そうではない、ネギ君に伝えてほしいことがあっての」

「え？」

駅のホームで２－Ａの生徒とネギを見つけた

帰ってなくてよかった

「ネギ、諦めるのは早いみたいだ」

「兄さん？それってどういうこと？」

「色々と手違いで遅刻組８人の点数が入ってなかったんだよ」

・・・学園長も面倒なことをしてくれたな

「・・・・で、でも私たちバカレンジャーの点数足したくらいじゃあんまり・・・・」

俺は８人って言ったよな？成績の悪い５人だけじゃなく図書館探検部３人の点数も入ってないんだぞ？

「佐々木まき絵・・・平均点６６点」

「ええっ！？

うそっ・・・・６６点・・・・！？」

全員分の点数を発表して・・・

「・・・さて、全員の点数を足してみると平均点は８１点になるトップのＦ組は８０．８点・・・つまり２－Ａがトップだ！！」

「「「「「「「「「や・・・・・やったーーーッ！！」」」」」」」」」

「え・・うそ・・でもそんな・・

ま、魔法の本がないのに一体どうやって・・！？」

「明日菜にはもう言ったけど・・・あんな本は関係ないんだよ

みんなの実力のおかげだよ

取り敢えず、試験は合格、これからも頑張れよ」

「あ・・・・うんっ！！
兄さん、アスナさん・・・・・僕」

「ははは、良かったね、ネギ
・・・・ま、とりあえず新学期からもよろしくね」

そう言ってネギの頭を撫でる明日菜・・・

「・・・そういうことだ
来年度からも『先生』として頑張らないとな」

「は、はいっ・・よろしくお願いします！」

さて、来年度も日本で先生か・・・
大変なこともあるだろうけど、俺は俺のやりたいようにやりますか
！！

第5話　自由人と図書館島（後書き）

作「樹ー打守・・・復活！」

レ「はい、なんとか復活したわけです」

作「じゃあ早速受け答えに・・・
眠〇打破って？」

レ「いや・・・徹夜する時に世話になってから常に冷蔵庫の中に入ってるんだよ」

作「一本で3時間は？」

レ「最初の一本はそうだったんだけど・・・二本目からは持続力が半分以下だったんだよな」

作「６０～７０メートルの壁がちょろい？」

レ「魔力を使えばちょろいぞ？」

作「君の見た夢って？」

レ「・・・ま、俺にも色々あったんだよ」

作「明日菜の魔法無効化は？」

レ「回復とか補助は受け付けるという独自解釈」

作「そういう展開はない？」

レ「あんたが考えない限りはな」

作「ふふふ・・・」

レ「何だ？その不敵な笑いは？」

作「抵抗感？」

レ「いや、だって・・・な」

作「これは明日菜フラ――」

レ「知らねぇって・・・」

作「ま、このぐらいで・・・
ちょっと調べたことがあります」

レ「何を調べたんだ？」

作「一つ目は『8人の成績が入っていないときのクラスの平均点』
二つ目は『もしバカレンジャーが全員0点だったら』です」

レ「作者の計算は鵜呑みにしないように自分で確認してみるといいぞ？」

作「えぇ～・・・
まぁいいけど・・・では一つ目の結果は」

ジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカ
ジャカジャカジャカジャカジャン！

レ「これはいるのか？」

作「気分の問題ってことで
一つ目の結果は約６２点でした～」

レ「修正後の最下位だったＫ組とも約７点差か・・・」

作「思ったより開いていると思うか、意外とそうでもないと思うか・・・」

レ「ま、見た人たちの考え方しだいかな？」

作「では二つ目の結果は・・・」

ジャカジャン！

作「結果は約７０．３でした～」

レ「ん？」

作「どうかした？」

レ「いや・・・最下位のクラスの平均点は？」

作「だから、Ｋ組の６９．５点だって・・・ん？」

レ「気付いたか？」

作「もしかして・・・バカレンジャーが全員０でも最下位はとらな

かった？」

レ「・・・ま、まぁ計算方法があたってるならな・・・」

作・レ「・・・・・・」

作「き、気になった人は試してください！作者は数学がそんなに得意ではないので！」

レ「で、では次回も！」

作・レ「お楽しみに！」

番外編　お嬢様の誕生日（前書き）

作者「どうも、作者の樹一打守です」

レント「レント・スプリングフィールドです」

作「オンラインゲームって楽しいね！」

レ「また突然だな・・・」

作「いや～久しぶりにア○ド戦記をやったら楽しくて・・・執筆してるのに悪いとは思いましたが・・・」

レ「お笑い芸人の○川さんがＣＭやってたな」

作「まあＣＭを見たからというわけではないんですが・・・」

レ「・・・そろそろ本編にも触れないか？」

作「はい！では本編についていきます！」

レ「今回は数字じゃなくて番外編だけど・・・？」

作「時間軸が図書館島の前なのか後なのかがわからなかったので・・・」

レ「なるほどね・・・・
それでは！」

作・レ「どうぞ！」

番外編　お嬢様の誕生日

――３月１８日
それはポーランド・ソビエト戦争が終結した日――

――３月１８日
それはギューリック博士が贈呈した『青い目の人形』が日本に到着した日――

――３月１８日
それは・・・

「木乃香の誕生日なのじゃ」

「はあ・・・」

放課後、レントは学園長に呼び出されていた

主観　レント

突然呼び出されたから何を言われるかと思ったら・・・

「君達で木乃香を祝ってほしいんじゃよ」

「はあ・・・
君『達』っていうことはネギもですか？」
「うむ
本当は儂もそうしたいのじゃが・・・・」
「・・・西の長も大変ですね」
立場上しょうがないとはいえ・・・孫のための時間ぐらいはとったほうがいいと思うけどな
「そういうことじゃ
ネギ君が世話になっているお礼と思ってやってくれんかのう？」
なるほどね・・・
「断ります」
「フォ？」
「お世話になっているから祝うというのなら断ります」
「い、いや、しかしのう・・・」
でも・・・
「誕生日は何かのお礼に祝うというわけではありませんから
それに、頼まれて祝う日でもないでしょう？」

「・・・フォフォフォ、そうじゃのう」

「それではこれで」

――場所は移って女子寮６４３号室（ネギ、明日菜、木乃香の部屋）――

「――だってさ」

部屋に居るのはネギと明日菜だけ
木乃香は部屋の風呂に入ってる。二度風呂が好きらしい

「木乃香の誕生日か・・・
プレゼントを贈ることはあったけど誕生日会とかは無かったかな」

「アスナさんはどんな物を贈ったんですか？」

「服とかアクセサリーだったわね」

「とにかく、３月１８日は占い研究部で木乃香は遅く帰ってくるらしい・・・
その間に準備を済ませてサプライズパーティーを開く
それでいいか？」

「「うん」」

誕生日まであと3日・・・何をするかな・・・

――プレゼント

「何を贈るかを決めるか」

「兄さんはどうするの？」

木乃香か・・・占い研究会部長だから占いに関係したものがいいか？

誕生日は3月・・・

それなら・・・

「決めた・・・が、秘密だ」

「え・・・どうして？」

「お互いにわからないほうが楽しいだろ？」

「プレゼントがかぶったらどうするのよ？」

「まぁ、そんときはそんときだ」

多分そうなっても喜んでくれると思うけどな

「でも・・・木乃香さんは何を貰ったら嬉しいのかな？」

「ま、大切なのは心の込めようだな」

――ケーキ

「誕生日ならケーキは大切だよな」
「でもどうするの？
どこかで買ってくる？」
「ん～・・・できれば手作りがいいんだけどな
ネギと明日菜は料理できるか？」
ネギは料理できたよな、多分
「僕は結構料理できますよ？」
だよなー
ネカネさん教えてもらってたからな
それで・・・
「私も作れるわよ！」
・・・やけに自信があるみたいだな
「よし、なら明日の放課後、キッチンに集合な」
「それで、何作るん？」
「いや、だから・・・
って木乃香！？」
もしかして・・・聞かれた？

「こ、木乃香・・・いつから聞いてたの？」

「？

キッチンに集合するってゆーたところやけど？」

「「「（（（良かったー！））））」」」

聞かれたらサプライズじゃないからな・・・危なかった

「何か作るんなら手伝いに行こか？ウチ、料理得意やから手伝うえ」

「え、えーっと・・・」

なんとか誤魔化したが・・・

よくあれを信じたな　良くも悪くも素直ってことか

――翌日の放課後

「・・・ハンドミキサーっと、これだけあれば上等だな」

「じゃあ、私が作るわね」

「頼んだ

・・・ネギ、ちょっと来てくれ」

「え、うん・・・どうしたの？兄さん？」

「・・・明日菜が料理してるのを見たことあるか？」

「アスナさんの？

・・・ないけど・・・どうして？」

やっぱないのか・・・

「いや、あの自信満々な感じは爆発オチになるような気がしてな」

「あはは・・・爆発はしないと思うよ？・・・たぶん」

そうだといいけどな

――まぁ

結果的に爆発はしなかった

爆発『は』しなかった・・・

その代わりに色々とカオスなケーキ（？）がおかれていた

「「・・・・・・」」

スプリングフィールド兄弟は黙っていた

――いや黙るしかなかった

「ほら、召し上がれ！」

――二人には悪魔の声に聞こえたとかそうでなかったとか――

「（ネギィイ！！何をどう料理すれば生クリームが緑色になるんだぁあ！？）
これケーキじゃなくて兵器だろ！？
ちょっと響きが似てるから聞き間違えたのか！？」

「（わ、わわわわかんないよ！？
何かケーキには絶対に使わないものが見えるし・・・）」

「（ああ、海産物が見える）」

・・・取り敢えず明日菜に聞こうか

「明日菜？」

「ん？どうしたの？」

「何て言いますか・・・こう・・・独創性溢れるというか・・・店で売ってるようなケーキとは随分違う気がするんですけど？」

「（なんで敬語？）
お店で売ってるようなのを作るんじゃなくて、こうやってアレンジするのがポイントなのよ」

そう言ってウインクする明日菜・・・ポイントって何だ？死の方向に加速させるポイントか？

「まぁ食べてみなさいって期待は裏切らないから」

期待は０なんだが・・・

明日菜が包丁をいれる・・・

「「（（ヒィィィ！））」」

切ったところから何か赤のような紫のような謎の液体がっ！？何が、一体何が詰まっているんだ！？

目の前には切り分けられたケーキ（？）が・・・

「・・・ほ、ほら、ネギは食べないのか？」

「に、兄さんこそ・・・食べないの？」

「お、俺はあれだ・・・見た目で味わうというか・・・」

「そ、そうだね～」

まぁ、いつまでも逃げることはできない・・・

「見るのはいいけど早く食べてよ
試食にならないじゃない」

「（ネギ・・・俺には無理だ

頼むっ！！）」

「（ぼ、僕にも無理だよ！！）」

「何ごちゃごちゃ話してんの？
じれったいわね」

「もがっ！？」

ネギの口にケーキを入れる・・・ヤバい？

「ネギっ！！大丈夫か！？」

「あ、あれ意外となんともないよ？ほら兄さんも食べてみてよ」

で、ケーキをすすめるネギだが・・・俺にすすめるって言ったけど
そのへんに掛けてあるフライパンのほうを見てる・・・しかも顔面
真っ青・・・というか真緑

「幻覚かっ！幻覚が見えるのか！
ドラッグが君の身体を壊していくっ！」

「どこのポスター！？
ってどういう意味よっ！」

「あ・・・父さんが川の向こうで手を振ってる・・・
今そっちに行くよ・・・」

「ダメだぁああ！！それは渡ったらアウトな川だ！！ネギ、帰って
こいぃぃ！！

あとナギさんは死んでないって自分で言っただろ！！」

――しばらくたって――

「ふう、取り敢えず大丈夫かな

明日菜、慣れてない料理はレシピ通りに作るもんだろ？」

「でも・・・」

「あれ？僕は・・・？」

ネギが目を覚ましたか

「えーっと・・・・・・ケーキが前に置かれて・・・それで・・・」

まさか・・・覚えてない？

「・・・まさか記憶を消すとは・・・魔法使いもビックリだな」

「だから、どーゆー意味よ！」

主観　明日菜

「よし、次は俺達の番だな」

「そーいえば聞いてなかったけどレントは料理得意なの？」

「僕も兄さんが料理してるのを見たことないよ？」

「まあ見てろって」

・・・一言だけ言うとネギとレントの手際はすごい良かった、特にレントは・・・

「ふんふふ～ん♪」

鼻歌混じりでケーキを作っていた
手の動きがすごく速い
しかも、それぞれの手で違う作業をしていた

しばらくたって・・・

「できた！」

「ああ、こっちも完成だ！」

二人ともできたみたい

「じゃ、試食を始めるか」

ネギのケーキ――
見た目に特徴的なところはないけど・・・
「「もぐもぐ・・・」」
「ど、どうですか？」
うーん・・・
「まぁ・・・悪くはないよな？」
「うん、美味しいけど・・・」
それは本当
美味しいとは思う
「基本に忠実過ぎてつまらないのか？」
「ええっ！？それは悪いことなの？」
「ん～・・・明日菜以上、店以下のケーキだな
もう少しアレンジしていいんじゃないか？」
私のケーキはアレンジしたんだけどな・・・
何で失敗したんだろ？
（注　材料から失敗してます）

「ま、誰かが食べるには充分だな」

レントのケーキ――

「これは・・・？」

「ケーキだけど？」

「そうじゃなくて・・・」

目の前にあるのはパティシエが作ったのではないかと思えるぐらいに形が整ったケーキだった――

「兄さんってこんなにすごいケーキを作れたの？」

「ああ、趣味で作っていたら上達してたんだよ」

・・・これは趣味でまとめていいの？

店が開けると思うんだけど・・・

「取り敢えず食べてみてくれよ」

「「もぐもぐ・・・」」

ん？

「す、すごく美味しいよ！」
ほんとに・・・すごい美味しい
・・・何でこんなに敗北感を感じるんだろ・・・
「甘みのだしかたにコツがあるんだよ
レシピは教えないけどな」
甘いけど、くどくはなくて・・・さっぱりしてる
何か隠し味でもあるのかな？

――で
「ケーキは俺が作る
二人は部屋の準備だな」
「そうですね」「そうね」
明日はプレゼントを買いにいかないと・・・

――３月１８日
女子寮６４３号室前――

主観　木乃香

すっかり遅なってしもたなー
帰ったらアスナとネギ君にご飯作って・・・大変やな

ガチャ

「ただい（パーンッ）・・・え？」

クラッカー？
アスナとネギ君だけやなくてレント君までおるし・・・？

「「「誕生日おめでとう！」」」

誕生日？
・・・あ、今日はウチの誕生日やったな

「はい、プレゼント
私からは服、
今度着てみてね」

「アスナには毎年プレゼント貰っとるな」

毎年もらっとっても嬉しいわー

「いいのよ、私は毎日料理作ってもらってるし」

「そか・・・そやな」

「それで・・・一つお願いがあるんだけど・・・」

「なんや？」

「その・・・今度料理を教えてほしいんだけど・・・」

どうしたんやろ？

「ええけど・・・アスナが料理するのは珍しいなー」

「・・・ちょっとくやしかったから」

・・・何があったんやろ？ネギ君とレント君は嫌なこと思い出したような顔になっとるし・・・

深く聞かんほうがええんかな？

「僕からはこれです」

「これは・・・タロットカード？」

「はい！

占い研究会で使ってくださいね」

キレーなカードやなー

弟からプレゼントを貰ったよーな気分やわ

「俺からはこれ」

「ブレスレット？」

金属でできたブレスレットに何かが埋め込まれとる・・・あ、金属のとこにウチの名前が彫られとる

「誕生石・・・アクアマリンのブレスレットだ
癒しのエネルギーを持つ石・・・安らぎをもたらす・・・
木乃香みたいな石だろ？」

ウチみたいな石？
レント君はウチのことそんなふうに見てくれとったんやな・・・ちょっと照れてまうわ

「でも大丈夫なん？これ、結構高そうやで？」

ウチは嬉しいんやけど・・・それでレント君が困るんはイヤやな・・・

「ん？ああ、安心してくれ
それ、手作りだから・・・まぁ材料費はかかったけどな
気にしないでくれ」

て、手作り！？
そんな簡単に作れるん？

「あ、それとこれが学園長から
こっちが父親・・・詠春さんからの手紙とプレゼント
二人とも「直接会えなくてすまない」だってさ」

おじいちゃんにお父様まで・・・ウチ、ホントに嬉しいわ

「みんな・・・ありがとな」

「まだ礼を言うのは早いって
じゃ、次はケーキを出しますか」

「・・・このケーキ、お店で買ってきたん?」

形もととのっとるし・・・

「いや、手作りだ」

また!?レント君なんかすごうない!?

「木乃香が京都生まれなのは知ってたから、抹茶のケーキにしてみた
あと・・・」

冷蔵庫から何かを出すレント君・・・もう充分やと思うんやけど

「好みにもよるけど・・・このバニラアイスと一緒に食べても美味
しいと思う」

・・・レント君ホントにすごいな

ケーキも食べ終わって――

「じゃあ、そろそろお開きにしますか」

みんなが後片付けを始めとる

「ウチも手伝うえ」

「今日はこのかが主役なんだからゆっくりしててていいのよ」

「そうですよ、このかさんは休んでいてください」

後片付け終了後――

主観　レント

「・・・誕生日会を開いといて言うのもなんだが・・・明日も遅刻はしないでくれよ？」

「それを兄さんが言うんだね」

「それ、レントが言うんだ」

「それをレント君が言うんやな」

・・・全員に同じようなことを同時に言われるとは・・・
自覚はあるけどな

「・・・まぁそうだけど・・・
取り敢えず、また明日学校でな」

遅くなったな・・・急いで帰るか

番外編　お嬢様の誕生日（後書き）

作「というわけで、木乃香の誕生日でしたー！」

レ「なんでまた？」

作「理由はいくつかありますが・・・
？　四巻でネギと木乃香が明日菜の誕生日ということでプレゼントを送っていたので逆もありかと
？　修学旅行編への準備
？フラグ？
？君のスペックの高さを出すためとか？」

レ「？　？　？はともかく？はいいのか？」

作「まあ、？がつくわけで・・・
一番大きな理由は？だったりするので・・・」

木乃香「それで、フラグってなんや？旗？」

レ「いや、だから・・・
って木乃香！？
この流れ本編でもやったぞ！？」

作「いつも代わり映えしないので・・・
ゲスト扱いということで」

木「よろしくな～」

作「じゃ、受け答えに入りますか」

作「どうやって木乃香を誤魔化した？」

レ「ご想像にお任せします」

木「受け答えってそーゆーのでええの？」

レ「ん？まあ大体こんな感じだけど・・・」

木「ならウチも質問してええ？」

作「いいと思うよ？
たまにはそういうのも」

レ「適当だな・・・」

木「じゃあいくえ～
アスナと料理の話をした時に何を思い出したん？」

レ「明日菜のケーキだな」

作「明日菜のケーキが見たい人はアニメ１期の１８話をどうぞ」

木「詠春さんってゆーたけど・・・お父様を知っとるん？」

レ「知ってる・・・ってだけじゃなくて直接面識があるんだけどな」

作「裏設定です」

木「それで・・・フラグってなんや？」

レ「・・・機会があったら教えるよ」

木「あ、そろそろ行かなあかん
ほなな～」

レ「・・・これから毎回ゲストが来るのか？」

作「気分次第ということで・・・」

レ「毎回ってわけじゃないんだな」

作「まぁ・・・口調とか大変なので・・・
木乃香の京都弁とか・・・
ここはこうじゃないか。というところがあれば指摘していただける
と嬉しいです」

レ「それでは次回も」

作・レ「お楽しみに！」

第6話　自由人と終了式（前書き）

作者「どうも、作者の樹ー打守です」

レント「レント・スプリングフィールドです」

作「今回は割とシリアスです
そして難しかった・・・」

レ「あ～・・・一週間かけてこの短さってある意味すごいよな」

作「いや本当に・・・すみません・・・」

レ「・・・まぁとにかく」

作・レ「どうぞ！」

第6話　自由人と終了式

3月　25日　　終了式　当日の朝――

「かーーーー・・・・」

レントは・・・

「すこーーーー・・・・」

爆睡していたっ！！

――――――――――――――――

主観　レント

――じゃあ今日は『魔法の射手』について教えるぞ――

――先生、今日はって言っても最近はずっと『魔法の射手』の授業をしています――

――な～に言ってんだよ

基礎は・・・こう・・・何て言うか・・・大切じゃねーか？――

――ぐだぐだですね・・・しかも・・・俺に聞きますか？――

――で～っひゃっひゃっひゃっ！

ぐだぐだなのはいつもだろ？

気にすんなよ～　で～っひゃっひゃっひゃっ！――

――・・・気にしたほうがいいですよ？その性格と笑い方は・・・

――

――――――――――――――――

「・・・ト、・ント」

んー？

「起きなさいよ！レント！！」

「うおっ！！

明日菜か・・・どうかしたのか？」

耳がキーンってする・・・

「どうかしたのか？・・・じゃないわよ！

先生は生徒より早く集まるんでしょ？」

そういえばそうだったな・・・

「ネギはどうしたんだ？」

「時間が無いって先に行ったのよ」

ふう・・・何回遅刻して始まるんだ？

読者の方々も飽きるって・・・

「ほら、早く準備しないと・・・」

「あ～・・・わかったけど・・・明日菜が部屋にいると着替えができないんだよな・・・」

「え？・・・あ、ご、ごめん！」

部屋を出ていく明日菜・・・いや、服を変えるだけだから見られるのが嫌ってわけじゃないけど・・・（あれ、怪しい意味に聞こえる？）

まぁ、見せる必要もないよな

「よし、完了！

明日菜、起こしてくれてありがとな、助かった」

「そ、それはいいんだけど・・・」

「じゃ、行ってくる」

急がないと間に合わないな・・・

「ちょっと――」

もうほとんど時間ないわよー！

と言った明日菜の声はレントには届かなかった・・・

――――――――――――

「すいませんっ！！遅れましたっ！！」

間に合わなかった・・・か？

「フォフォフォ・・・間に合っておるよ
あと数秒で遅刻じゃったがな」

セーフ！良かった～

「じゃが、１０分前行動というものを習わなかったのかのう？」

・・・訂正、アウトだ

「まぁレント君のことは後にしようかの」

また説教か？・・・いやだなぁ

「ハッハッハッ
やはり変わってないね、レント君は」

タカミチ・・・

「多分、これは変わらないと思う・・・」

――――――――――――――――

終了式――

「フォフォフォ
皆にも一応紹介しておこう――
新年度から正式に本校の英語科教員となるネギ・スプリングフィールド先生、英語科副教員となるレント・スプリングフィールド先生じゃ
二人には4月から『3―A』を担任してもらう予定じゃ」

オオ～って言ってるけど・・・突っ込む人はいないんだな、都合はいいけど・・・
裸の王様みたいに堂々としすぎて突っ込めないのか？

教室――

「というわけで2―Aの皆さん
3年になってからもよろしくお願いしまーす！！」

「よろしくな」

「よろしくネギ先生ーっ！！レント先生ーっ！！」

「先生、こっち向いてこっちーっ！」

「ほら見て見て～っ

学年トップのトロフィー！」

「おお～っ

みんな先生達のおかげだねーっ」

「二人の先生がいれば中間テストもトップ確実だーっ！」

上から椎名、朝倉、まき絵、裕奈、風香が言う・・・

俺達だけのおかげじゃないと思うけどな

「――そのとおりですわ先生＆（そして）皆さん

万年ビリの２―Ａがネギ先生を中心に、固い団結でまとまったのが

期末の勝因！

クラス委員長としても鼻が高いですわ

今後とも私たちクラス一同よろしくお願いします、ネギ先生」

「おーい、俺はスルーか？」

「いいんちょはショタコンだからね～」

「なっ！今言ったのは誰ですか！？

もちろんレント先生にも言うつもりでしたわよ！

・・・私たちではネギ先生を支えられないところもあります・・・

そんな時はレント先生が支えてあげてください」

ま、それも仕事の一つなんだけどな

「結局ネギ先生のことなんだにゃー」

「裕奈さん！」

一段落――

「ハイッ
先生ちょっと意見が！」

「はい、鳴滝さん」

「先生は１０歳なのに先生だなんてやっぱり普通じゃないと思います！」

ざわつく教室・・・普通のことだけど今更だよな

「えーと・・」

「それで史伽と考えたんですけど――・・」

「「今日　これから全員で『学年トップおめでとうパーティー』やりませんか！？」」

おーそりゃいいねえ！
やろーやろー！
じゃ、ヒマな人寮の芝生に集合！

まぁいいけど・・・前後の文のつながりがないんだよな
しかも出席番号２５番、長谷川千雨――千雨だな――が早退した・・・許可ぐらいはとろうな？
それをネギが追いかけた・・・ま、なんとかするだろ・・・多分

じゃ、久し振りに生徒から話を聞きますか！

――――――――――――――――

武道館――

主観　???

「ふっ！はっ！」

今年度はお嬢様を狙う刺客は現れなかったが・・・いつ狙われるかはわからない、用心しなくては

「お疲れ、刹那
部活熱心だな」

「レント先生・・・」

全く気配を感じなかった・・・

「・・・私に何か？」

「ちょっと話を聞きにきただけだ
ま、理由は第2話参照で」

「第2話？どういう意味ですか？」

「大丈夫、読者の方々はわかってくれるから
とにかく、神鳴流の剣士ってことで話がしたくてな」

私が神鳴流の剣士だということを・・・そうか、先生達は魔法関係者だったか・・・

「わかりました」

「・・・なるほど、やっぱり2―Aの魔法関係者は多いな・・・」

「あくまで私が知っていることですが・・・」

「それじゃ、次は刹那自身のことだ」

私・・・自身のこと？

「刹那って鳥族と人のハーフじゃないか？」

なっ――

「・・・反応からして、そうみたいだな」

「ど、どうしてそれを・・・」

この学園であの姿を見せたことはないはず・・・

「俺は魔力とか気の流れを読むのが得意だからな

刹那は翼があるからほんの少し流れが違うんだよ・・・っと、俺の

ことはいいんだ
・・・クラスメイトに話しかけないのもそれが原因か？」

「・・・・・・」

話してもいいのだろうか？
自分の正体を詳しく知ったら嫌われてしまうのでは？
もしそれがお嬢様やクラスの人に伝わったら――

「・・・話したくないなら話せとは言わない、誰にも伝えない
でも・・・つらかったらつらいって言ったほうがいい
相談ならいつでもしてくれよ？」

武道館を出ていく先生・・・
ハーフと知っても何も言わなかったレント先生なら受け入れてくれるかもしれない・・・
そう思っていても拒絶されてしまうのではないかという考えを消すことができない・・・
私は・・・

――――――――――――――――――――

主観　レント

・・・どうも、色々抱えてるみたいだ
過去に何かあったのかもしれないな・・・嫌悪、迫害、拒絶・・・
そんな言葉と関わりのあることが・・・
それにしても・・・ハーフなら人にも鳥族に受け入れられないか・・・
・それにあの感じ・・・多分、他の何かも抱えてるかもしれない・・

・
精神的には問題は無かったはず・・・身体的な何か？
可能性としては・・・俺の見ていないところ、翼や服の下の異常？・
・・でも服の下なら体操着に着替えるときにクラスメイトに気付か
れるか・・・ってことは翼か？
あ、一応アルビノっていうのも考えられるかな？肌は白かったし瞳
と髪の色ならカラーコンタクトをつけて染めればなんとかなるか？
アルビノか・・・あいつ、元気にしてるかな？

「あ～～～！！
考えるのは面倒だ！」

話してくれるのを待つか
・・・まぁ、他人事でもないか・・・ちゃんと話さないとダメだよ
な・・・パーティーが終わったら話そう・・・

――――――――――――――――

寮の芝生――

「ちょっと先生、
や、やっぱり返してよメガネ！」

・・・千雨か？メガネって言ってるし・・・しかしよくその格好で
来たな

「はくしゅんっ！！」「きゃあっ！？」

あ、しまった
レジストするの忘れてた

「おおーー！！
バニーの服が一瞬で花びらに！？」
「スゴイ、手品や！！」
「スゲー、ネギ先生！」

ま、２―Ａならこのぐらいのことは気にしないか
――で、千雨ってことがバレて生徒達に追いかけられる・・・がんばれ！

それで――

「来たんだな、刹那
でも何で剣道着？」

「・・・着替える時間が無かったので」

なるほど、話のあとに考え事でもしたのか？

「そうか、まあ来てくれてよかったよ」

「に、兄さ～ん、止めるのを手伝ってよ～」

「わかったー！
じゃあな、刹那」

「はい・・・」

じゃあ収拾をつけますか！

――――――――――――――

その日の夜――

女子寮６４３号室前――

コンコン

軽くノックをする・・・それだけでこんなに緊張するんだな・・・

「はーい・・・レント君？
どうしたん？こんな時間に？」

「ちょっとネギに話があってな
少しネギを借りていいか？」

いつも通りに言えたと思うけど・・・

「僕に・・・話？」

「ああ、寮の外まで来てくれ」

「それで・・・どうしたの？兄さん」

言わないと・・・ダメだよな・・・

「ネギ・・・俺は・・・」

――その時、レントは一つのことを思い出した

――なっ・・・何だ、家の子に何をする気だ！！――

違う、俺はそんなつもりじゃ――

――この子を殺すつもり！？――

俺はもう・・・そんなことはしない

――・・・怖いよ、パパ、ママ――

違う・・・違う！・・・違う！！

俺はただ謝りたくて――

――二度とこの子にも、この家にも近付くな！この化け物！――

化け物・・・その言葉が痛かった・・・

自分が人じゃないと思い知らされたみたいで――

「兄さん？」

もしかしたらネギにも拒絶されるかもしれない――

そんなことはないと頭ではわかってる・・・それでも心のどこかでは・・・怖い・・・

「俺は・・・」

――沈黙

「俺は・・・もっと魔法そのものの修行をしたほうがいいと思う」

「え？」

「ほら、今日も『武装解除』の魔法を暴発させただろ？生徒も困ると思うんだよ」

「・・・うん、そうだね

わかった、制御できるようにがんばるよ！」

「・・・がんばれよ

じゃ、おやすみ」

「おやすみ、兄さん」

ネギが寮に戻っていった・・・言えなかったか・・・

なぁ、どうすればいいんだ？

「先生・・・」

――その声は静寂な夜の空に寂しげに響いた――

第6話　自由人と終了式（後書き）

作「どうでしたか？」

レ「ん～・・・自分の過去が堂々と載せられるのはちょっとな・・・」

作「堂々と、とは言っても少しだけですけど」

レ「まあいいけど・・・
で、受け答えか？」

作「いえ、今回はありません」

レ「え？」

作「いや、ネタバレしそうなので・・・」

レ「それでも一つぐらいあるんじゃないか？」

作「じゃあ一つだけ・・・これってフラ「ふおぉおお！！」痛っ！！・・・なにするんだ！」

レ「よりによってそれを言うか！？他のは！？」

作「ない！むしろアルビノについては作者が聞きたい！」

レ「威張るな！」

作「アルビノのネズミとかは想像しやすいんですが・・・人は分かりにくいんですよ・・・皮膚は白いんですかね？
あとアルビノって聞いてモ〇ハンを思い出さないように！」

レ「最後のはいらなくないか？」

作「いやいるって、モ〇ハンプレイヤーなら絶対思うから、鬼〇薬グレートとか作るときに使うから」

レ「エキスの話はべつにいい！
まあとにかく、今回のことは時間がくるまで待ってください」

作「予想するのはいいのですがそれを感想に書くのはやめてください
感想は嬉しくても予想を書かれると・・・テンション的に・・・ね」

レ「そういうことなので、よろしくお願いします
それでは次回も！」

作・レ「お楽しみに！！」

第7話　自由人の春休み（前書き）

作者「お久し振りです
作者の樹ー打守です・・・」

レント「レント・スプリングフィールドです」

作「はい、まずは・・・2週間も空けてしまいすいませんでしたっ！」

レ「すいませんでした」

作「それなのに本文の長さがあまり変わっていないというのもすいませんっ！
言い訳をさせていただくと・・・慣れないことをしたからですね」

レ「その結果は本文をご覧下さい
それでは！」

作・レ「どうぞ！！」

第7話　自由人の春休み

午前7時――

「・・・」

レントは・・・

「ん～・・・」

起きていた！！

主観　レント

不思議だなぁ・・・学校がある日は起きないのに休みの日は自分で起きるから
早く起きてもすること無いんだけどな

こんな時は・・・

――――――――――――――――

「――で・・・何故貴様が家に居る！？」

「あ、お邪魔してま～す」

「マスター、レント先生がケーキを作ってきてくれました
前にマスターがレント先生が作ったケーキは美味しいと言っていたので」

「ケケケッ、良カッタジャネェカ」

エヴァンジェリン邸――
そこは『人形使い（ドールマスター）』『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』『不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトゥ）』などと呼ばれ、恐れられた『吸血鬼の真祖（ハイ・デイライトウォーカー）』とその従者である人形が暮らす家――

「ええいっ黙っていろ！！
何の用かは知らんが早くでていけ！！」

ま、こうなるのはわかってたけどな
・・・でも

「ケーキ、作らなくてもいいのか？」

「ぐっ・・・（たしかに・・・こいつのケーキはそのへんの店の物

よりも美味い・・・）」

手応えあり！ここで！！

「でも勝負しないで決めるのは許さないだろ？こういう時は・・・」

たしかこのへんに・・・お、あったあった

「・・・６〇のス〇ブラで決着をつけるっ！！
ストックは３つ、時間は無制限だ！！」

どうだ？乗るか、反るか・・・

「フッ・・・いいだろう
だが、私のピカ〇ュウに勝てると思うな」

乗ったか
でも・・・

「俺のカー〇ィが負けると思うのか？」

「マスター、楽しそうですね」

「アイツガ来タ時ハイツモコウナルンダヨ
御主人トゲームガシタクテココニ来ル奴ナンテ、アイツシカイネー
カラナ
マア、実際ニ殺シ合ウホウガ見テルホウモ楽シイト思ウケドナ」

「よし、勝った・・・！」

「ぐ・・・まだだ！次はゲームキ○ーブのス○ッシュブ○ザーズＤ○だ！」

「ス○デラか・・・俺はリ○クでいく！」

「私はガ○ンだ・・・悪の力を見せてやる」

「おい、下投げからの回転切りはやめろ！」

「却下！」

「そうか・・・ならばこれでも受けてろ！」

「ああっ！メテオはひどいだろ」

「このぐらいは基本だ！」

「ふう・・・同点か」

緊急回避の失敗が痛かったか・・・

「最後はス○ッシュブ○ザーズXだ！」
「待った！今は一応２００３年だから！
それはオーバーテクノロジー！！」
茶々丸も充分そうだけどな
「関係無い
早くコントローラーを選べ」
「ん・・・それなら俺はゲームキ○ーブのを使う」
「私はヌンチャク付き、W○iのコントローラーだ」
「ス○ッシュボールゥウウ！！」
「とらせるか！！」
「うおっ！来るなぁああ！！」
「ス○ッシュボールは貰った！
ギガク○パの前にひれ伏せ！！」
――――――――――――

しばらくして――

「ふう、疲れた～」

「まあいい、話ぐらいは聞いてやる」

「ありがとな、エヴァ
話っていうのはさよ、出席番号1番の相坂さよのことなんだけど・・・見えてるよな？やけに隠密性が高い幽霊だけど」

「・・・ああ、見えているよ
理由は違うが私と同じ様にこの学校に縛られているようだな」

「地縛霊だからな
それで、さよを2―A・・・というより3―Aの生徒にも見えるようにしたいんだけど・・・方法はないか？」

「元々存在感が無いようだからな、目立つことでもしたらどうだ？」

「う～ん・・・それでも霊体は魔力がないと見えないんだよな・・・人とか物に憑依させたら見えるんじゃないか？」

「実行するなら霊的な物が必要だろうがな」

「やっぱりそうか・・・ま、それだけでも充分だよ
もうひとつ、茶々丸って・・・ロボットだよな？あと俺の修業の時はいなかったよな？」

さっきのゲームよりオーバーテクノロジーな気がするんだけど・・・
まぁいいか

「茶々丸は2年前からここにいるロボットだよ
茶々丸が来たのはお前が修業を終えた後のことだ」

・・・兵装とか積んでないよな？

「そうか・・・まあとにかく、3年生になってもおとなしくしててくれよ？
じゃあな」

「茶々丸、あいつには気を付けろ」

「レント先生ですか？」

「ああ、ふざけた奴だが魔力は本物だ
それでも全開の私の敵ではないがな」

「わかりました」

ん～・・・何しようか

〈ピンポンパンポーン♪
迷子のご案内です　中等部英語科のネギ・スプリングフィールド君、
保護者の方が展望台近くでお待ちです〉

・・・ネギが迷子？保護者って・・・俺か？
どうせ暇だから行くか

――――――――――――――――

っと、いたいた

「迷子になったらしいな、ネギ」

「ち、違うよ！アスナさんが・・・」

「わかった、ゴメンゴメン
レントはどうしてここに？」

「いや保護者って立場に近いのは俺だと思ったから一応な」

暇潰しでもあるけど

「そうや！レント君も一緒に学園を回らへん？レント君もどこにな
にがあるかわからんやろ？」

ん？そういえば言ってなかったか？

「俺はこの学園に来るのは初めてじゃないんだよ
だから大体の地理はわかってる」

「兄さんも僕ぐらいの時にここで先生をしていたんですよ」

「ふーん・・・だから教えるのも上手かったんだ」

思ったより驚かないな・・・寧ろ納得って感じか

「あや？おじいちゃんからメールやわ」

学園長がメール？機械使えるのか？

「うちら二人に用事やて」

「げー」

明日菜は本当にいやそうだな

「あ、じゃあ行ってください
兄さんと回りますから」

「そうだな、いい暇潰しになる」

「あ、レント君も呼んできてほしいやって」

俺何かしたか？

・・・学園長に呼ばれる回数多くないか？

「じゃあ一人で色々探検してみますから」

「うーんでもネギ君一人じゃ・・」

「先生ーっ何してんのー！？」

この声は・・・

「あ！鳴滝さん達だ、こんにちはー」

「ちあーっ！」「こんにちはー」

出席番号２２番の鳴滝風香と２３番の鳴滝史伽だな、双子だったよな？

なら呼び方は風香、史伽かな、名字だと同じだから

「あ、あんた達いい所に」

――――――――――――――――

――で、ネギを二人に任せて学園長のところへ向かう・・・

散歩部か・・・この学園だからこそできる部活だよな

ってもう着いたか

「失礼します」

「フォフォフォ、ごくろうじゃった

話というのはのう・・・」

話は木乃香のお見合いについてだった・・・学園長は相変わらずみたいだな

「部外者が口を出すことではないかもしれませんが、本人の意思も確認せずに話を進めるのはいいことではありませんよ」

「そうじゃのう・・・考えておこう」

・・・全く聞く気配が無いな

「それでレント君への話じゃが・・・少し二人は外してくれるかのう」

「わかりました、アスナ行こ」

二人が部屋を出ていく・・・さて

「二人を出ていかせたのは魔法に関することだからですか？」

「うむ、最近魔力がひとつの場所に集まり形を成しているという現象が起きていてのう

今のところは実害はないがいつ被害が出るのかもわからん」

なるほど・・・

「つまり、それをなんとかすればいいんですね」

「そうじゃ、詳しいことは後日話すことにしようかの」

「わかりました
では失礼します」

「あ、何の話やった？」

木乃香か、あ～・・・どうやって誤魔化すかな

「・・・先生の仕事についてだよ
もう遅いから二人とも早く寮に帰れよ」

久しぶりに魔法使いとして動くことになるかな

――――――――――――――――

数日後の学園長室――

「学園長、レント・スプリングフィールドです」

「うむ、入ってよいぞ」

「失礼します」

「それでのう、今回のことはここに居る者に協力してもらおうと思っておる」

紙？えーと・・・

「龍宮神社？

・・・九州まで行くんですか？」

「いやいや、龍宮神社ではなく龍宮神社じゃ」

龍宮か・・・そういえば

「学園長、クラスの出席番号１８番、龍宮真名と裏の世界で有名な龍宮真名は同一人物ですか？」

「気付いておったか・・・同一人物じゃよ

今日の仕事を手伝うのも彼女じゃ」

なるほど

まあ話を聞くにはちょうどいいか

「では、失礼します」

「気を付けての」

―――――――――――――

はあ～・・・随分大きい神社だな
さて、本人を探しますか

ん？白衣に赤い袴――巫女装束だったか？――を着た女の人が掃除をしてるけど・・・真名か？

「ん？なんだ、レント先生じゃないか？」

「よっ」

「そうか、仕事を手伝う人というのはレント先生だったか」

「そういうことだな
できれば生徒にこんな仕事はさせたくないけど・・・」

「ふふ・・・心配してくれるのか・・・」

「先生が生徒を心配するのは自然なことじゃないか？」

・・・俺はとことん先生に影響されてるんだな・・・

「いや、すまん
あまり人に心配されることがないものでな
では、用意をしてくる」

「了解」

――――――――――――――――

――市街地――

「あ、そういえば俺、敵(ターゲット)の姿聞いてないんだけど・・・」

「今回の獲物は決まった形では現れないようだ」

どんな形にもなるってことか・・・ん？

「真名、あの人・・・」

「流石だなレント先生
あれが獲物だ」

遠くに居るのは人・・・みたいな姿をしているけど・・・魔力の塊だなるほど、学園長が人払いをした理由はこれかん～・・・姿が人だと気が引けるな

「じゃ、さっさと終わらせますか」

――銃声が二回鳴り響いた――

「真名、それ本物？エアガン？」

「エアガンだよ

先生は魔法銃か、久しぶりに見たな」

・・・本当か？まあいいけど

「これ、俺のじゃないんだ、黙って少し借りてきた」

「アスナさん、ここに置いてあった僕の銃を知りませんか？」

「知らないわよ

ってそんな危険なの持っててていいの？」

「まあ後で謝るよ

・・・どうも、集まってきたみたいだな」

「そのようだな、囲まれているみたいだ」

人の姿、動物、魔法生物、なかには形ができていないのもいるな

「ざっと５０・・・もう少しいるか？

頼むから無茶はするなよ？」

「ふふ、心配も協力も感謝している

だが――」

真名が二丁拳銃に持ちかえて周りの１０体ぐらいを撃った・・・

「私の戦場に男は無用だ」

うわーお

心配する必要もないってことかー・・・

「ま、それでも協力させてもらうよ」

そう言って魔法銃を撃つ――

「5体か・・・まあ充分だな」

「意外だな、銃を使いこなしているとは」

「まあ、一通りの武器の基本ぐらいは使えるよ」

「（基本とは思えない速撃ちだったがな）」

「この調子ならすぐに終わりそうだな」

３０分後――

「２００っ！
ふう、敵の数が減らないな」
「いや、少しずつだが減っている」
「そうか、良か――」
・・・これは？かなりの魔力が集まってる・・・
「安心するのはまだみたいだな」
魔力が集まっている先には――
「・・・また随分と大きいな」
形はライオンみたいだな
尤も、大きさは比べ物にならないか・・・全長１０ｍぐらいか？
「そこまで強大な獲物はないと言っていたが・・・情報とずれているな
報酬ははずんでもらうよ、学園長」
余裕だな、生き残るのが前提で話してるまあ・・・
「殺されるつもりはないけどなっ！」
魔法銃を撃った――が

「吸収された！？」

「レント先生！魔法銃はあいつには効かない」

「そうみたいだな・・・
その銃ならいけるか？」

多分、魔法の射手とかの魔法も効かないな・・・この依頼にネギが来てたら太刀打ちできなかったな

「ああ、それに体が大きいやつは隙も大きい！」

敵の爪を避けながら照準を合わせる・・・って銃を下ろした？なんで？このままじゃ・・・迷ってる場合じゃないか！

主観　真名

「ああ、体が大きいやつは隙も大きい！」

隙ができた、今だ――
ん？あれは・・・なぜ犬がこんなところに！

「チッ」

仔犬を抱き抱えたが・・回避が間に合わない――

ガキィン――

「冷徹、非情の仕事人って聞いてたけど・・・随分優しい仕事人だな」

間に入って来たのは長剣を持ったレント先生だった

「無茶はするなって言っただろ？
俺が守るよ、先生だからな」

――お前はオレが守る！俺たちはパートナーだろ！！――

どこかで聞いたことのある台詞だな・・・

「――ま、そういうことで・・・ここからは少し本気だ
『戦いの歌』！！」

身体能力の強化か

「よっ・・・と！」

跳躍して獲物の頭を体ごと一回転しながら切りつける
だが、傷付いたところはすぐに元通りになった

「再生・・・
魔法吸収に再生ってもう反則レベルだな

それでも戦い方しだいか・・・なあ、少し作戦があるんだけど乗ってみないか？」

「作戦？」

「まあ、作戦って言うほど複雑でもないけど・・・銃の腕とその『眼』があればいける！」

眼・・・まさか私が半魔族（ハーフ）ということを？

「気付いていたのか？」

「そういうのには敏感なんだよ
それで、乗ってくれるか？」

ふむ・・・

「わかった
乗らせてもらうよ」

―――――――――――――――

主観　レント

この作戦が無くても真名なら倒せそうだけど・・・確実に倒すためだな

「準備はいいか？」

「ああ、いつでもいい」

建物の屋上にいる真名が答えた

「よし・・・いくぞ！」

まずはこいつを一時的に行動不能にする・・・！

一閃――

巨大な獣の前足をレントが断ち切り、バランスを崩す

「いけっ！！」

「まかせろ

どんな敵も我が魔眼からは逃れられん！

・・・見えた！胴体に３つ、頭部に２つの急所！

あそこを同時に撃てば・・・・」

その時、獣の体から打ち出されるように魔力の塊が放たれた

ズゥンッ！

「なっ――」

しまった！

魔力が吸収できるなら魔力を『放出』する可能性もある！そのことに気付けなかった・・・
まずい・・・真名の足場が壊された・・・
「真名っ！！」
頭から落ちてる・・・これじゃ――
「今度はミスはせんぞ！」
えっ・・・まさか・・・
ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！
空中で体勢を立て直しながら5発の弾丸を命中させる・・・すごいな
「真名、怪我はないか？」
「ああ」
――――――――――――――――
「今回は情報とは全く違った強力な獲物だったそれなりの報酬金は用意してもらわないとな」
「同意見だな

並の魔法使いなら勝てない相手だ、気を付けてもらわないと・・・
じゃ、先に帰るよ」

こんなに動いたのは久し振りだったから疲れた・・・
あ、そうだ

「その年でこんな仕事をやってるのは理由があると思うから止めはしない。元々止める権利も無い
でも本当に危ない仕事だってわかったら、その時は俺を呼んでくれ、手伝うから」

「・・・わかった、考えておくよ」

「じゃ、また新学期に」

―――――――――――――――――――――

「悪かったなネギ、魔法銃(これ)勝手に借りて」

「え？あ、良かった～兄さんが持ってたんだ・・・」

「それにしても・・・なんか部屋散らかってるな、明日菜」

「ネギがそれを探してたから散らかってるのよ」

あ～なるほど

「つまり、半分ぐらいは俺が悪いってことか」

この後もどうせ暇だな・・・

「よし、お詫びに今日は俺が夕食を作るよ」

「うーん・・・そうね、木乃香は帰りが遅いって言ってたし・・・頼むわね」

木乃香は帰りが遅いのか・・・それなら冷めても美味しい料理がいいな

「わかった、任せてくれ」

――――――――――――――――

翌日――

「――で・・・何故また貴様が家にいる！」

「マスター、レント先生がクレープを作ってきてくれました前に――」

「黙っていろ！！

・・・何の用だ？」

「今日は聞いてくれるんだな」

「その方が早く済みそうだからだ」

「そうか・・・今日は・・・」

・・・・・・

「暇潰しだ」

「帰れぇぇぇぇぇ！！」

第7話　自由人の春休み（後書き）

作者「どうでしたか？
初めての戦闘描写だったのでかなり不安です」

レント「小説内でも初めてなんだよな・・・疲れた」

作「作者も結構疲れました・・・
ちょっとエヴァンジェリンを暴走させすぎたような気がします・・・
でもゲーム仲間というか・・・一緒にやる人がいないと考えたらこうなりました
・・・作者はス〇ブラシリーズが大好きです」

レ「楽しいけど・・・知らない人は置いてきぼりのような気がする・・・」

作「そのとおりです・・・
あとは真名の心理描写が難しい・・・一応ネギま！？ｎｅｏを参考にしましたが」

レ「ん？そういえば受け答えは？」

作「あ、やりません
あれは結構疲れますし、読者の皆様に想像してもらうのも楽しいかと・・・要望があれば考えますが」

レ「なるほど、手抜きか」

作「まあ言い方変えるとそうですけど・・・

取り敢えず、作者は頑張ります！」

レ「これからも応援よろしく！
それでは次回も！」

作・レ「お楽しみに！！！」

第8話　自由人の春休み？（前書き）

樹ー打守「どうも
作者の樹ー打守です」

レント「レント・スプリングフィールドです」

樹「はい、今回は春休み？です
今回はレント君の特徴と特殊技能（？）ができます
あとは・・・作者が暴走してます・・・」

レ「ま、詳しいことは後書きで・・・
それでは！」

レ・樹「どうぞ！！」

第8話　自由人の春休み？

「ん～」

朝か・・・時計は・・・

――午前4時――

「早っ！！」

まだ寒い朝――

一人突っ込みが響いた

主観　レント

「本当に不思議だな・・・」

7時ぐらいなら早起きで済むけど4時って・・・何故？

――まあ、理由は当然あるわけで――

――――――――――――――――――――――――――――

時間は昨日の朝

午前7時――

「朝か・・・エヴァにも追い出されてすることないな・・・寝るか！」

午前１０時――

「ん・・・１０時か・・・朝飯、朝飯食べたら・・・寝るか！」

午後１時――

「・・・１時か・・・昼飯食べるか２時からは修業だな・・・まあ、修業っていうより基礎体力作りだけどな」

午後４時――

「よし、終了！

あ、夕飯の材料の買い出しに行かないと」

午後６時――

「ごちそうさま～
後片付けをしてっと・・・ふあぁ・・・眠たくなってきた」

午後８時――

「ん・・・」

「あ、レント先生！」

「ん？あ、さよ」

「す、すいません・・・起こしてしまいましたか？」

「あ～・・・いやいや、大丈夫だから、そんな泣きそうな顔しないでくれ」

午後１０時――

「――それじゃあそろそろお開きにしますか」

「あ、はい
おやすみなさい」

「おやすみ」

時間を戻す――

「・・・考えても理由がわからないな（注　理由は殆ど明確です）
ま、このまま寝るのもいいけど・・・明日から学校なのに寝てばっかなのはまずいよなぁ・・・」

――そこに気付いているのに早く起きる理由がわからないことが不思議だが――

「何か言ったか？・・・まぁいいか
じゃ、適当に散歩でもしますか」

主観　明日菜

「ふぁ～」

ねむ・・・それにしても、明日から新学期か・・・私達も中3かぁ～

「ん？明日菜か
どうしたんだ？こんな朝早くに」

「え？レント・・・って、えぇ！？なんでレントがこんな時間に！？」

え、だって、レントはいつも遅刻・・・あれ！？

「・・・そこまで驚かれるといっそ清々しいな
理由はわからないけど早く起きたんだよ
で、明日菜は新聞配達だよな？ご苦労様」

「うん
そういえば、レントは空飛ばないの？前にネギが飛んでたけど」

「ネギが見せたのか・・・認識阻害の魔法があってもちょっと無用心だな
えーと、空を飛ぶには基本的に箒とか杖が必要なんだよ、でも持ち歩くのも面倒だから普通は歩くことにしてるんだ」

「そうなんだ」

「それじゃ、俺も質問していいか？」

レントが質問？

「いいけど・・・なにを？」

「なんで新聞配達してるんだ？生活に困ってるわけじゃないだろ？」

そういえばレントには言ってなかったかな

ネギに言った時は・・・あの日には良い思い出がないわね・・・

「私、両親がいないから

学費は自分でかせいでるのよ」

「あ・・・悪い・・・」

「いいのよ、気にしてないから

でさ、小さい頃からこのかのおじいちゃん・・つまり学園長のお世話になってたんだけど・・・いつまでも迷惑はかけられないし、少しずつでも働いて返そうって思ってさ

まあ学園長はいいって言ってくれてるんだけどね」

「そうだったのか・・・」

「でもさすが兄弟ね、同じことを聞くんだから」

「ん？ネギも同じこと聞いたのか？

・・・でも俺とネギって血は繋がってないんだよ」

「え？」

確かに見た目は似てないけど・・・

「俺も両親がいなくてさ、それをナギさん・・・ネギの父親に引き取られたんだ

・・・っと、少し話しすぎたな・・・時間も無いし、手伝うよ」

「う、うん・・・」

新聞を持っていくレント・・・

そういえばレントってあんまり自分のこと話さないわね・・・あ

「ちょっと！どの家に配るかわかってるの！？」

「終わった～」

「おつかれさま

ほら」

ジュース？

「俺のせいで遅くなったようなもんだしな、これぐらいのことでバチは当たらないって」

「うん、ありがと」

「じゃあ少し休憩したら帰るか・・・俺も明日菜達の部屋に行っていいか？」

「いいと思うけど・・・どうしたの？」

またネギに用事とかかな？

「何かあるってわけじゃないけど・・・暇なんだよ
春休みの間は学校の宿直室に人はこないし（幽霊は来たけど・・・
夜に来るから眠いんだよな）」

「そういうことね・・・」

――――――――――――――――――――――――――――――――

女子寮６４３号室――

ん？何かあるわね・・・こ、これ！

「ただいまー
ちょっと、ネギネギ！」

「わああっ！ゴメンなさい！！」

「何あわててんのよ？」

「い、いえ別にっ！
ど、どうかしたんですか！？」

側にはネギとレントしかいないけど・・・大声で魔法のことは話せないわね

「（これよ！これ！イギリスからのエアメール！魔法学校からとか書いてあるよ バレたらどうすんのよ！無用心ねー）」

「（あ、ホントだ）」

「（ちゃんとしてくれよ　俺も処分くらうだろ？ま、今はこれを読むか）」

『ひさしぶりネギ、レント
元気にしてる？』

「わあー♪お姉ちゃんからだ」

手紙から女の人の姿が出てきた？

「わっ何コレ。スゴッ、さすが魔法使いねー
これがあんたのお姉ちゃん？」

「まあ、お姉ちゃんって言ってるけど従姉弟だったよな？」

『ちゃんと先生になれたのね　おめでとう
レントも、ネギを見守ってくれてありがとう
でも、これからが本番だから気を抜かずに頑張ってね
それと・・・・ふふっ　ちょっと気が早いけどあなた達のパートナ

ーは見つかったかしら？
魔法使いとパートナーは惹かれあうものだから　もうあなた達の身近にいるかも知れないわね
修業の期間中に素敵なパートナーが見つかることを祈ってるわ』

「パートナー？」

パートナーってやっぱり・・・

「パートナーかぁ～
やだな、お姉ちゃん　僕にはまだ早いよー
でも兄さんは考えなくていいの？」

「俺もまだちょっと早いよな
考えるだけにしておくよ」

「ちょっとぉー　何よ二人とも、パートナーって
恋人のコト？」

「あ～違う違う
簡単に言うと・・・」

――昔話に倣って、現在でも社会においてサポートする『魔法使いの従者（ミニステル・マギ）』という相棒がいる・・・パートナーとはそれのこと　読者の方への説明終了
くわしくは単行本2、3巻で――

「親切なモノローグだな
・・・ってことだ」

「へー」

結構長い説明だったけど凄く短く感じる・・・なんで？

「それってやっぱり女の子？てゆーか異性なの？」

「まあ、普通はそうだな」

「で、今だと大体そのパートナーと結婚しちゃう人が多いんですけど」

「じゃやっぱ恋人みたいなもんじゃんー」

「へーー

二人とも、実は恋人探しに日本に来たん？

じゃあ、ウチのクラスだけでも３０人やからよりどりみどりやな♪」

・・・この声って・・・

「いや違うって・・・うおっ！？木乃香！？」

「木乃香、いっ、いつから聞いて・・・・！？」

ま、まさか今の話を聞かれた！？

「途中からやけど、何の手紙なん、それ？」

「あ～、何でもないよ（ネギ、手紙を隠せ）」

「（うん）」

木乃香なら気にしないと思うけど・・・って、あれ？木乃香が入口を開けた？

「みんなー！ネギ君とレント君、恋人探しに日本来たらしいえー！！」

ああー！皆にそんなこと聞かれたらややこしいことになるってー！！

「ストップ！木乃香、頼むからストップ！！」

「違います！！本当に先生やるために来たんですよーっ！！」

「スマンスマン、冗談や。
アスナ、レント君、おじいちゃんがまた呼んどるから行ってくるわー」

学園長が？あ、お見合いか

「またあの話？」

「せやー」

「学園長も諦めないな～」

「？

何の話ですか？」

「木乃香も苦労してるってことだよ」

私だったら嫌になってるかもね
木乃香も楽しくないみたいだけど

「フーー
でも驚いた」

「バレたかと思いましたよ」

「聞いたのが木乃香じゃなかったらバレてたんじゃないか？」

――そう、彼等は気付かなかった・・・ドアの影に隠れていた二人

「聞いた？」

「聞いたです」

・・・鳴滝姉妹に！！――

「たた、大変ですー！！」

「大ニュースー！
先生たちは日本にパートナー探しに来たらしーよーっ！！」

「な、何ですって！？」

「ネギ先生とレント先生がパートナーを探してる！？」

「パートナーって恋人のこと？」

「結婚相手でしょー」

「結婚相手を探すって何か映画とかみたいだねー」

「これは噂だけど先生は小国の王子で正体を隠してるらしいよー！」

「えーっ！じゃあ玉の輿！！」

「おおー♪」

――こうして、９割間違ったウワサは１５分で寮内をかけめぐったという――

主観　レント

「はーさっきは危なかったなー」

「ほんとにな。バレたら連れ戻されて、場合によってはオコジョにするって魔法学校の校長が言ってたな」

「うん。バレないように注意しないと」

俺はオコジョにはされないと思うけど・・・連れ戻されるのはちょっとな～

あのクラスの雰囲気は好きになれそうだ・・・付いていけない時も

あるけど

「よし！パートナー探しのことはしばらく忘れよう
まずは明日からの学校に集中だ！」

「そうだな」

「先生～っ！！」

「ん？」「はいはい」

ドドドドド！！

「「――え？」」

いやいや・・・何で？

「ぜひとも私をパートナーに～～っ！！」
「私も私も！レント王子～～！！」

「わあ～～っ！？」「ええ～～っ！？」

パートナーのことを！？あと王子って何だ！？

「パートナー探してるんだって！？」
「それって恋人なの！？結婚相手なのー！？」
「あの・・・・舞踏会はいつ・・・・？」

前半２つは・・・まあいいとして、舞踏会？さっきの王子発言といい・・・何か誤解がないか？

「先生、王子様って本当！？」
「いつも持ってる変な棒は王家の証で、２人で奪いあってるとか」
「お妃にしてええ～～ん♪」

「何の話だっ！！　（ですかぁ！！）
逃げるぞ！ネギ！」

ん～・・・撒く手段はいくつかあるけど・・・魔法はバレないようにするとなると・・・よし！

――その時のレントは悪人の顔をしていたらしい――

「ネギ」

「ど、どうしたの兄さん？」

「『二兎を追う者は一兎をも得ず』っていう日本のことわざを知ってるか？」

「え？うん、勉強したから・・・どうして？」

「その意味も知ってるか？」

「え～っと・・・『２つのことを同時にするとどっちも上手くいかない』だったっけ？
あ、そうか！二手に別れるんだね！」

「意味はそんな感じ
二手に別れるか・・・半分正解だな」

「え？」

「逆に考えれば・・・『1つのことに集中すれば上手くいく』ってことだよな？」

「う、うん・・・」

「『相手が1つなら集中できる』ってことだよな？」

「えーっと・・・兄さん？」

ガシッ！っとネギの腕を掴む

「『ネギ1人に集中してれば俺に被害はこない』ってことだよな？」

「兄さぁああん！？」

「逝ってこい！ネギ！！
そおぉおおおれぇええい！！」

そのままネギを追ってくる生徒のほうへ軽く投げる

「今の「いってこい！」ってどういう意味ぃいい！？」

「あ、ネギ先生がこちらに！！」「ネギ王子～♪」

ふう・・・逃げるか

「ネギ、恨むなら自分の不幸を恨め・・・」

――おいおい、キメてるところ悪いけど、明らかにお前が悪いだろう――

「何だ、失礼なモノローグだな」

――さっき親切なモノローグとか言ってなかったか？――

「それはそれ、これはこれ。まあいいだろ？
俺は宿直室に帰ってるよ」

――

「ふう、ここまで結構距離あるよな」

さっさと部屋に帰って・・・することないよな
まあいいか

「レント君？」

「ん？」

この声は・・・もしかして

「木乃香？」

着物・・・あ、お見合いって言ってたな

「レント君、どうしてこんなところに・・？」
「木乃香さまー！？どこですかー！？」
着物でここに居て、探されてる・・・抜け出したのか？
「あっ、アカン
レント君、ウチ逃げな・・！！」
「あ～・・・了解、大体察した
取り敢えず宿直室に来るか？」
「そーやな・・・うん、そうするわ」

「・・・来ないみたいだな
それにしても、木乃香は着物が似合うな」
「そ、そう？ありがとな」
「俺が誕生日に贈ったそれ（ブレスレット）も着けてくれてるんだな」
「うん
学校の時は着けれんけど・・・ウチの宝物やからな」
「そうか・・・ま、大切にしてくれるなら贈って良かったよ

それで、今は学園長の趣味でお見合いをさせられてるのを抜け出した・・・そんなとこだろ？」

ま、学園長って意外と抜かりが無いし、自分の趣味だけじゃなくて血筋を守るっていう意味もあるかもしれないな・・・

「今日はお見合い用の写真撮らされる所やったんけど・・・途中で逃げてきてもーた、まだウチら子供やのに・・将来のパートナー決めるなんて早すぎると思わへん？」

・・・それでも、本人の意志は確認するべきだよな

「ま、そうだな。焦ることは無いと思うよ」

「そう言えばレント君もパートナー探し中やったっけ？それやったらウチ、おじさんとかよりレント君がパートナーの方がええなー」

「お、俺！？」

「レント君はウチがパートナーやったら・・・嫌？」

「・・・そういうわけじゃないけど・・・」

そんな顔されても困るんだよな・・・俺がそんなことになったらあの二人（詠春さんと学園長）に何て言われるか・・・

「・・・もう大丈夫やと思うし、そろそろ行くな」

・・・黙ってたのがまずかったか？

「待っ――」

ガツッ！

・・・ガツッ？

「きゃ！」

――音だけでは何が起こっているのか読者の方々にはわからないと思われるので、説明すると
立ち上がった木乃香を引き止めるためにレントが手を掴んだ・・・が、勢い余って置いてあったテーブルの足に自分の足をぶつけてしまった。とさ
つまり、ラブコメ的に考えると――

「あ、その・・・ごめん・・・」

「へ？・・・えと、れ、レント・・・君？」

――レントが木乃香を押し倒してる状況ってわけ！――

「「・・・・・・」」

――ついでに言うと、ここは宿直室・・・レントの部屋（仮）、さらに誰も来ないことは確認済み・・・つまりっ！――

「（モノローグ黙れぇえええ！！
読者の方々が勘違いするような言い方をするなぁあああああ！！）
」

――嘘は言ってないし、話を盛ってもいません――

「（このやろぉおおお！！
あれか？さっき、失礼なモノローグだなって言ったのを根に持ってんのか？）」
――いやいや。失礼なモノローグでも、心は小さくありません――

「（根に持ってるだろぉおお！！お前絶対根に持ってるだろぉおおお！！）」

――ま、モノローグと話しても読者は喜ばないから。
ほら、早く若い男女二人きりの桃色空間に戻りな――

「（その言い方止めろぉおおおお！！）」

・・・はっ！えーと・・・あのモノローグ・・・後でブッ飛ばす！！
お、落ち着け俺・・・取り敢えず、まずは誤解を解く！

「あ～、木乃香？これは態とじゃないんだ。偶然なんだ」

「ほ、ほか
でもレント君が動かんとウチも動けんのやけど・・・」

「そ、そうだな、悪い――」

「レント・・・このかに何してんの？」

・・・え？

「い、いや誤解だ明日菜！誤解なんだって！！
だから、その鬼みたいな威圧感を出すのを止めてくれ！！」

「言い訳は・・・終わった？」

俺の生命に危機が迫ってる！？

「ア、アスナ
レント君はそんなことしてないえ」

こ、木乃香・・・偶然とはいえあんなことになったのに・・・感謝しないといけないな

「・・・まあ、このかがそう言うんなら本当なんだろうけど・・・」

俺、信用無いのか？・・・って、あの状況で言っても説得力があるわけないか・・・

「それより、二人とも逃げたほうがいいわよ
ここに居たら――」

ドドドドドッ！！

「うわーん！

ひどいよ兄さーん！！」
「ネギ王子ーッ！！」
「あ！レント王子発見ーッ！！」
「このかお嬢さまー！」
「わー」「うおっ！」
こ、これは・・・ヤバい？
「・・・逃げるか？」
「・・・そやな」
入り口からは無理か・・・窓だな
「木乃香、こっちだ」
「に、兄さん！待ってよー！！」
「あ、レント王子が！」
「このかお嬢さまー！戻ってください！！」
「と、部屋は荒らすなよ～
じゃ！」

「ん～・・・まだ追ってくるか・・・」

「レ、レント君・・・ウチ・・もう・・走れな・・・・」
走りっぱなしだからな・・・しょうがないか・・・
「よっ」
「ひゃあ!?・・・レント君!?」
「しっかり捕まっててくれよ!」
「（お、お姫様抱っこ・・・）」

主観　木乃香
「・・・結局、寮に戻って来たな」
アカン・・・恥ずかしくてレント君の顔見れへん・・・
「お～い、木乃香?」
嫌やなかったけど・・・ってウチ、何を言って――
「木乃香～?」

「な、なんや！？」

「・・・どうかしたのか？
まあ、皆ここまでは来ないだろ・・・多分
そろそろ落ち着いただろうし、俺も部屋に戻るよ・・・っと、忘れるところだったけど・・・少しブレスレットを見せてくれないか？」

「え、ええけど・・・」

あ、手を・・・強く握られとるで顔が赤なっとると思う・・・
あれ？今なにか光ったような・・・？

「どうしたん？」

「ん、あ～・・・少し耐久性に不安があったんだけど・・・木乃香が大切にしてくれてるから心配はないみたいだ
これからも大切にしてくれよ？」

「大丈夫や、絶対大切にするえ」

「じゃ、そろそろ行くよ
また面倒なことになったら呼んでくれれば行くよ」

「ほか、ならお見合いされそうになったらレント君に連れ出してもらうな」

「了解
・・・さっきのパートナーの話だけど・・・嫌じゃない。ってだけ言っておく」

「え？」

「じゃ、また明日学校でな」

行ってまった・・・さっきからドキドキするんやけど・・・もしかしてウチってレント君のこと・・・

主観　レント

「パートナー・・・か」

木乃香のことは好き（生徒として）だけど・・・今は嫌じゃないとしか言い様がないよな・・・本当に俺のことを知ったら俺が嫌われるかもしれないし・・・

この話はもういいか・・・取り敢えず明日からの学校を頑張ろう！！

そういえば・・・ネギは大丈夫かな？ちょっと悪ノリしたからな・・・後で謝るか

「ネギ王子ー！！」

「に、兄さ～ん！！」

第8話　自由人の春休み？（後書き）

樹「どうでしたか？」

レ「今回からこのコーナー（？）にも名前が欲しいということで、（仮）の名前を付けました！」

レ・樹「その名も！」

『レントと樹ー打守の後書き通信！！（仮）』（垂れ幕）

レ「・・・吃驚するぐらいヒネリも何もない名前だな」

樹「あはは・・・一応あるアニメをパク・・・ごほん！参考にしました」

レ「問題発言するなよな～
それじゃ、本編の内容へ・・・」

樹「さて、じゃあ――」

レ「取り敢えず・・・せい！」

樹「痛っ！一体何を！？」

レ「いや本文で「後（書き）でモノローグブッ飛ばす！！」みたいなこと言ったけど、モノローグはブッ飛ばせないから元の作者を。と思って」

樹「あれって後書きでっていう意味だったの！？
まあ、そういうことで・・・特殊技能の１つ『モノローグとの意志疎通』ですね」

レ「全く嬉しくないスキルだな。というより捨てたい」

樹「まあそう言わないで・・・
特徴としては・・・『自分の行動を客観的に見れない』を出したかったのですが・・・失敗したような気がします
矛盾が出てしまうかもしれないので指摘していただけると嬉しいです
あと・・・ラブコメって難しい・・・無理矢理になってしまったような・・・」

レ「慣れないなら止めればいいのにな・・・」

樹「まあ、これからも色々と幸せな酷い目にあってもらう予定なので・・・」

レ「え？」

樹「何だかんだで次回からエヴァンジェリン編です
戦闘描写等も頑張ります」

レ「何か納得できないけど・・・応援よろしく！

それでは次回も！」

レ・樹「お楽しみに！！」

樹「コーナー名は活動報告にて募集します
第１０話あたりまで募集しようと思っています」

――ー作者こぼれ話――――

はい、作者です
ここでは小説と関係の無いことを話すので「貴様の話なんぞ何の興味もないわ！！」という人は見なくてもＯＫです
つまり、作者のゲーム話等々ですね

１つ目はテイルズ　オブ　エクシリアです
ＰＶやばいですね、本当に楽しみです
キャラデザに藤島先生といのまた先生、奥村先生が関わっているのもなかなか・・・もちろんＢＧＭにも期待しています・・・もちろんシステムにも――
まあ、とにかくすごい期待をしています

２つ目は遊戯王ＴＦ６です
カード引き継ぎ・・・だと！？
９枚集めを頑張っています
ＥヒーローとＭヒーローの混合デッキと代行儀式天使を作りたい・・

・

あとは・・・夏休みの課題ピーンチ！！
毎年こうなるのはわかってるのに・・・作者は学習しません
楽しみの前に大きな壁がありますが・・・徹夜で頑張ります！！
それでは付き合ってくれた方々、ありがとうございました！！

第9話　月下の吸血鬼（前書き）

樹「どうもっ！！作者の樹ー打守ですっ！！」

レ「レント・スプリングフィールドです
何かやけにテンション高くないか？」

樹「それはぁ・・・当然じゃないですかぁあああ！！」
レ「あ、ああ・・・そうか（詳しいことはいいか）
それでは！」

レ・樹「どうぞ！！」

第9話　月下の吸血鬼

主観　レント

「・ント・」

ん・・・

「レント君」

木乃香？

「・・・おはよう」

「あ、起きとったん？」

「ああ、ついさっき

・・・何か色んな人が俺を起こしにくるな」

最初はネギで次は明日菜、今日は木乃香か・・・

「今日はウチの番って言うとったよ？」

・・・いつから当番制に？

「まあ、ありがとな

それより・・・随分早いな」

「そうやった？でも、準備に時間掛かるんやない？」

「大丈夫だよ
よく遅刻ギリギリで学校に来てるから、準備を早く終わらせるのには慣れてる」
注）　基本的に遅刻ギリギリ。ではなく完全に遅刻しています
「余計なことは言うな
でも、時間があるならちゃんと朝食を作るか
木乃香は適当にくつろいでてくれ・・・木乃香？」
何か俯いてるけど・・・考え事か？
「（そういえば、昨日ここで・・・）」
――その後、少女の顔は赤かったとか・・・――

――――――――――――――――――――――――

――数時間後の元２―Ａ、現３―Ａ教室
「「「「「３年！Ａ組！！
ネギ先生ー！！＆レント先生ーっ！！」」」」」
本当に元気だなぁ
って、まき絵は欠席か？
「えと・・・・改めまして、３年Ａ組担任になりました、ネギ・ス

プリングフィールドです」

「同じく、３―Ａ副担任になったレント・スプリングフィールドだ」

「これから来年の３月までの一年間、よろしくお願いします」

「よろしくな」

「はーい！」

「よろしくー♪」

挨拶も済んだところで・・・何をすればいいんだ？

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ

３―Ａのみんなもすぐ準備してくださいね」

あ、しずな先生

初登場おめでとうございます

じゃ、廊下で待ってるか

「あ、そうでした！ここでですか！？

わかりました、しずな先生！」

・・・ん？何か小さい魔力みたいな感じが・・・一体どこから・・・？

少し見てくるか

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――桜通り

あれは・・・まき絵？何でこんなところで・・・？それにこの魔力の残り香・・・まさか・・・いや、考えるのは後でいい

取り敢えず、保健室にでも運ぶか・・・どうやって運ぼう？

――――――――――――――――――――――――――――――――

で、結局抱き抱えてきたけど・・・何があったんだ？

「失礼します・・・あれ？レント先生？

って、まき絵やん！！」

えーと、出席番号５番　和泉亜子だったか？・・・亜子だな

そう言えば保健委員だったな。保健委員の仕事でここにきたのか

「何故か桜通りで倒れてたんだ

多分異常は無いと思うけど・・・」

「た、大変や！みんなに知らせんと！！」

・・・行っちゃったよ

まあ、深く追及されなくてよかった。教室から桜通り、桜通りから保健室まで移動する時間が明らかに一般の人よりも短いからな・・・

バレてるわけでもないし、今回はいいよな？

――数分後

「兄さん！」

ネギか・・・って、皆来てるのか

「ど・・・・どーしたんですか、まき絵さん！？」

「桜通りで寝てたところを見つけたんだ」

ネギが考え込んでるか・・・ちゃんと魔力には気付いたみたいだな

「なんだ、大したことないじゃん」

「甘酒飲んで寝てたんじゃないかなー？」

「昨日暑かったし涼んでたら気を失ったとか・・・・」

それは・・・随分長い間寝てたり気を失ってたんだな

「ちょっとネギ、なに黙っちゃってるのよ」

「あ、はいはい。すみませんアスナさん

まき絵さんは心配ありません。ただの貧血かと・・

それとアスナさん、僕、今日帰りが遅くなりますので晩ご飯いりませんから」

「え・・・・？う、うん」

・・・この魔力はやっぱり・・・事情を聞きに行かないとな

――――――――――――――――――――――――――

――夜　エヴァンジェリン邸

「おーい！エヴァァー！」

居ない・・・まさか入れ違いになった？

まき絵を襲ったのは誰かが生徒を襲っているってことを見せ付けるため。そうすればネギが動くはずだからな

今日は満月、エヴァの魔力が少しだけ戻る日。そして残っていた魔力・・・動いてるのは多分エヴァだ

これは失敗したかもな。エヴァを家で止めたほうが人目につかないと思ったけど・・・ネギに付いてたほうがよかったかもしれない

それより、血を吸われる前に助けに行かないと！

――――――――――――――――――――――――――

主観　ネギ

桜通り・・・ここに犯人が来るはず・・・あれは宮崎さん？

「２７番、宮崎のどかか・・・・

悪いけど、少しだけその血を分けてもらうよ」

「キャアアアッ！！」

あれが犯人！？宮崎さんが危ない！！

「待てーっ！！」

「！！」

「ぼ・・僕の生徒に何をするんですかーっ！！

『風の精霊１１人　縛鎖となりて敵を捕まえろ　魔法の射手・戒めの風矢！！』」

これなら・・・！

「もう気付いたか。『氷楯』・・・・」

バキキキキンッ！！

「僕の呪文を全部はね返した！？」

や、やっぱり犯人は・・・・魔法使い・・・・！？

「くっ・・

驚いたぞ、凄まじい魔力だな・・・・」

「えっ・・・・き、君はウチのクラスの・・エ・・エヴァンジェリンさん！？」

「フフ・・・・新学期に入ったことだし、改めて歓迎のご挨拶と行

こうか、先生・・・・いや、ネギ・スプリングフィールド
１０歳にしてこの力、さすがに奴の息子だけはある」え・・・・

「な・・・・何者なんですか！あなたはっ！！
僕と同じ魔法使いのくせに何故こんなことを！？」

「この世には・・・・・・・いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ、ネギ先生
『氷結　武装解除！！』」

あのフラスコは触媒？ま、魔法を防がないと！！

「うあっ！？」

「抵抗（レジスト）したか
やはりな・・・・」

そ、そんな、エヴァンジェリンさんが犯人で、しかも魔法使いだなんて！？

「み、宮崎さん、大丈夫！？・・・・って、わあっ！？」

は、裸に！？ど、どどどうしよう！！

「何や今の音！？」

「あっ！ネギ！！」

アスナさんとこのかさん！？

「あうっ！？」

「あんた・・・それ・・・！？」

「い、いえあのこれは・・」

「ネ、ネギ君が吸血鬼やったんか～！？」

「ち、違います！！誤解です――」

そ、そうだ。エヴァンジェリンさんは！？

「あっ！待て！！」

いつのまにか離れてる・・・追いかけないと！

「え・・・今のは・・・・？」

「ア、アスナさん、このかさん、宮崎さんを頼みます！身体に別状はありませんから
僕はこれから事件の犯人を追いますので
心配ないですから先に帰っててください！！」

「え、ちょっとネギ君・・・・」

「じゃあ！」

――ネギは某人類最速の人以上の速さで走り出した――

「いい魔法使いと悪い魔法使いがいるだって・・・・！？」
「世のため人のために働くのが魔法使いの仕事のはずだろっ」
それに『奴の息子』って・・・あの人、僕のお父さんのことを知ってるのかな・・・・？
・・・考えるのは後にしないと・・・あ、あれは
「いた！」
「！
はやい。そう言えば坊やは風が得意だったな」
バッ！
「あ！！」
杖も箒もなしに空を飛んだ！？
ただの魔法使いじゃないぞ・・・・でもおかしいな・・
すご腕の魔法使いにしてはさっきの魔法は威力が弱いし・・・・さっきから呪文の発動にわざわざ魔法薬を触媒に使ってるのも変だ！
「待ちなさーい！
エヴァンジェリンさん、どーしてこんなことするんですかー！
先生としても許しませんよー！！」
「はは。先生、奴のコトを知りたいんだろ？奴の話を聞きたくはないのか？

私を捕まえたら教えてやるよ」

父さんの・・・・！！

「・・・・・・本当ですね？

ラス・テル・マ・スキル・マギステル　『風精召喚！！剣を執る戦友――」

様々な武器を持ったネギの姿をした精霊が現れる

「分身！？　（いや、『精霊召喚（サモン・エレメンタル）』か）」

「捕まえて！！『」

「（風の中位精霊による『複製（コピー）』・・・しかし８体同時召喚か！！なるほど、１０歳の見習いとは思えん魔力だ・・・・）」

――精霊の攻撃を防ぎ、衝突音が響く――

また魔法薬！やっぱりだ、なぜかこの人は魔力が全然弱い・・・・勝てる！！

「追いつめた！これで終わりです！！『風花　武装解除！！』」

あ、あれはコウモリのマント？あれで空を・・・・？

取り敢えず、下の建物の屋根に下りよう

「・・・・やるじゃないか先生」

「こ・・これで僕の勝ちですね

約束どおり教えてもらいますよ。何でこんなこととしたのか
それに・・・・お父さんのことも」

「お前の親父・・・・すなわち・・・・『サウザンドマスター』のことか。ふふ・・・・」

――!!何故それを・・・・・!?

「と・・とにかく!!魔力もなく、マントも触媒もないあなたに勝ち目はないですよ!!
素直に・・・・」

「これで勝ったつもりなのか?」

――ズシャッ!と音をたててエヴァンジェリンの背後に誰かが降りてきた――

「さあ!お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

新手・・・・・!?仲間がいたのか。仕方ない二人まとめて

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　『風の精霊11人　縛鎖となりて　敵を捕まえろ!!』」

「ふ・・」

「『魔法』あたっ!!」

お、おでこを・・・

「あたた？
えっあれ！？き、君はウチのクラスの・・・・」
「紹介しよう。私のパートナー、３―Ａ出席番号１０番　『魔法使いの従者　（ミニステル・マギ）』絡繰　茶々丸だ」
「え・・なっ・・！？ええ～～～！？
茶々丸さんがあなたのパートナー！？」
「そうだ
パートナーのいないお前では私には勝てんぞ」
「な・・・・パ、パートナーくらい、いなくたって『風の精霊１１人―――』あう゛う゛う゛」
ほ、ほっぺたを引っ張られた・・・
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「『風の――』」
ズビシッ！
あたっ！な・・・・
「驚いたか
元々『魔法使いの従者　（ミニステル・マギ）』とは戦いのための道具だ。今や恋人探しの口実となってしまっているがな

我々魔法使いは呪文詠唱中、完全に無防備となり、攻撃を受ければ呪文は完成できない
そこを盾となり、剣となって守護するのが従者（ミニステル）の本来の使命だ
つまり・・・・パートナーのいないお前は我々二人には勝てないということさ
せめて、副担任のあいつを連れてくるんだったな」

そそそそんなあ～～～！？

「茶々丸」

「申し訳ありません、ネギ先生。マスターの命令ですので」

「うぐぐぐー！」

ふ、振りほどけない・・・

「・・・・ふふふ。ようやく、この日が来たか
お前がこの学園に来てから今日という日を待ちわびていたぞ・・・・
お前が学園に来ると聞いてからの半年間、ひよっこ魔法使いのお前に対抗できる力をつけるため、危険を冒してまで学園生徒を襲い血を集めた甲斐があった
これで奴が私にかけた呪いも解ける・・・・」

「え・・・・の、呪い・・！？」
「そうだ、真祖にして最強の魔法使い、闇の世界でも恐れられたこの私がなめた苦汁・・・・
――私はお前の父、つまりサウザンドマスターに敗れて以来、魔力も極限にまで封じられ、も～～～15年間もあの教室で日本のノー天気な女子中学生と一緒にお勉強させられてるんだよ！！」

「え・・・・そんな・・僕、知らな・・」

「このバカげた呪いを解くには・・・・奴の血縁たるお前の血が大量に必要なんだ

・・・・悪いが死ぬまで吸わせてもらう・・・・・」

「うわあ～～～～ん！誰か助けて～～～っ！！」

「ん・・・・」

「うあっ」

か、噛まれた

こ・・こんなことになるんだったら・・・・誰かパートナーを探しておくんだったよ～～～

主観　レント

あ～、どこまで飛んで行ったんだよ

多分この辺りだと思うんだけど・・・・

「うわあ～～～～ん！

誰か助けて～～～っ！！」

ネギの声？・・・・居た！屋上だ！

「よっ、と」

やっぱりエヴァか・・・茶々丸まで・・・

「おいエ「コラーッこの変質者どもーーーっ！！」ヴァ？」

「ウチの居候に何すんのよーーーっ！！」

「はぶぅっ！！」

・・・明日菜？飛び蹴りでエヴァの障壁割ったけど・・・明日菜の蹴りって一体・・・？

「！？

か、神楽坂明日菜にレント！！」

「あっ、あれー？

あんた達ウチのクラスの・・ちょっ、どーゆーことよ！？

ま・・まさかあんた達が今回の事件の犯人なの！？しかも二人がかりで子供をイジめるような真似して・・・・

――答えによってはタダじゃ済まさないわよ！」

「ぐっ・・・・」

「エヴァ、取り敢えず退かないか？ふらついてることだし、家に戻ったほうがいいだろ」

「・・・よくも私の顔を足蹴にしてくれたな、神楽坂明日菜・・・・お、覚えておけよ～～」

「あ・・・・ちょっと！」

お～、飛び降りるのか～

「・・・・・・ここ８Ｆよ・・・・・？」

「大丈夫だよ。エヴァも魔法使いだ」

さて・・・

「ネギ、大丈夫か？」

「うっうっ・・・」

少し血を吸われたみたいだけど・・・他に目立った傷は無いか

「無茶はするなって。ま、怪我もほとんで無くて良かった――」

ひしっ

「うわーん！兄さーーん！！」

抱きつくほど怖かったのか？・・・いや、まあ・・・１０歳には怖いか？

「こっこわ・・こわこわかったよーー！」

「わかったわかった

ほら、今日はもう寮に帰って休んだらどうだ

明日菜、あと頼んだ」

「あ、うん、わかった」

「思わぬ邪魔が入ったが・・・・坊やがまだパートナーを見つけていない今がチャンスであることには変わりない・・・・覚悟しておきなよ、先生・・・・
そして、問題はやはりレントか・・・・何か手を考えておかないとな・・・」

第9話　月下の吸血鬼（後書き）

レ「レントと！」

明「明日菜の！」

レ・明「後書き通信（仮）！！」

明「――って、これ何？」

レ「明日菜は後書きへの登場おめでとう
まあ、ここは深く気にしたら負けの世界だ
因みに、何故作者が居ないのかというと・・・こんな手紙が置いてあった」

樹『今回はこぼれ話でスタンバってるから！あとはよろしく！！』

明「・・・え？どういう意味？」

レ「ま、気にするな
（てか、こぼれ話って1回で終わりじゃなかったんだ）」

レ「そう言えば明日菜、１つ聞いていいか？」

明「どうしたの？」

レ「俺を起こすのはいつから当番制になった？」

明「えーっと・・・いつのまにか？」

レ「そんな適当だったのか・・・明日は誰？」

明「ネギだと思うけど・・・あんなことがあったからね」

レ「不確定か・・・ま、いいか
それでは次回も！」

明・レ「お楽しみに！！」

―――――――――――――――――――――――――

～～～作者こぼれ話～～～
はい！今日もやりますよ。というか今日だからこそやりますよ！！
興味の無い方はスルーでも問題はありません！

今日（9月8日）は・・・テイルズ　オブ　エクシリアの発売日！！
長かった・・・早くプレイしないと・・・・禁断症状が↑どんな症状だ
あ～楽しみです

ここからは少し真面目な話
なんだか執筆ができない・・・今回は大半が原作のままなんですよね・・・スランプなんでしょうか？
少し不安ですが、頑張ります

それでは、また次回

第１０話　自由人と新しい助っ人　（改）（前書き）

樹「どうも、作者の樹ー打守です」

レ「レント・スプリングフィールドです」

樹「修正しました。　元の部分は同じなので大きくは変わりませんが・・・」

レ「ま、結果は本文で・・・それでは！」

樹・レ「どうぞ！！」

第１０話　自由人と新しい助っ人　（改）

主観　明日菜

「こらーっ！　ネギ坊主、もう８時よっ！
いーかげん起きなさい！！
あんた一応先生でしょっ！？
先生が遅刻したら生徒に示しがつかないでしょーが！」

「・・・・・何かカゼひいたみたいで・・・・あと、遅刻なら兄さんもしてますよ・・・？」

・・・レントは遅刻してないわよ？
ＳＨＲの始まりと同時に教室に入ってきたこともあったけど・・・

「もー・・・」

しょうがないなー・・・布団を取って、無理やり連れていこっと

「あっ！」

「昨日怖い目にあったのはわかるけどね――
先生のくせに登校拒否してどーするのよ！　ホラッ！」

「あ～～～ん
パンツだけは！！　パンツだけは許してください――！」

着替えさせたら抱えてでも連れていかないと

――――――――――――――――――――――――

「お、おろしてくださいーっ！
エヴァンジェリンさん達がいたらどーするんですかーっ！」

「学校で襲ってきたら校内暴力で停学にしちゃえばいーでしょ」

「そそ、そんな簡単な話じゃ！　（ま、魔力を封じられてるとはいえ、歴戦の魔法使い・・しかもホンモノの吸血鬼だなんて・・！か、勝てない・・・・次に会ったら殺されちゃう～っ！）」

――3―A教室前

「ア、アスナさん！　やっぱり・・・」

「もー
早く教室に入るわよ」
「あー・・・何かビリビリする・・・止めたほうがよかったたか？」

って、レント・・・？

主観　レント

ん～・・・昨日の様子から見て、ネギが仮病か何かで学校を休もうとしたのを明日菜が無理矢理連れて来て、学校に来るのが遅くなる。と、思ったからちょっと試してみたけど・・・

――また随分と驚異的な洞察力（というかご都合主義？）で――

そういうことは言うな！

「レント、おはよう」

「ん？　ああ、おはよう」

気付かなかったけど、明日菜と木乃香、ネギが居たのか
いつもより時間も遅いし、ネギが教室に入るのを嫌がってるところから大体予想は当たってたかな？

「おはよー
でも、レント君が1人でこの時間に起きてくるのは珍しいなー」

「んー・・・ま、たまにはな」

とはいえ、二度とするつもりは無いけど

――時間は昨日の夜

「んー・・・早く起きるにはどうすれば・・・」

――普通に目覚まし時計使えばいいじゃねーか――

「それは駄目だ。　寝惚けたまま目覚ましを『魔法の射手』で破壊するから」

――どんだけ目覚まし嫌い！？――

「ま、誰かに起こしてもらうなら明日菜、木乃香、ネギは無理だとして・・・」

3―A生徒？

いや、この時間に頼むのはな・・・さよが居れば頼んだけど

タカミチ？悪くは無いけど・・・あの人結構忙しいからな・・・

学園長？

いやいや。　ないない。

あらゆる面で

・・・俺は知り合いが少ない・・・本当に少ないな

タカミチと学園長はこの時間帯に何処に居るのかも知らないし・・・

（探す事は出来るけど）

誰かに起こしてもらうのは無理か

んー・・・あ、そうだ！　確か『遅延呪文』を体内に埋め込むっていう応用技術を聞いた事が・・・

「プラクテ・ビギ・ナル・・・」

何の魔法を使えばいいんだ？　ある程度の衝撃は必要だよな・・・
炎・・・はアウト。　燃えるから
水・・・も駄目だな。　窒息する
風は衝撃が無いし・・・氷なんて使ったら冷凍状態になる
光を使ったら体が吹き飛ぶ。　闇を使えば呑まれる・・・
雷？　これはこれで・・・いや、加減さえ！　加減さえ間違えなければ！！　少し痺れるぐらいで済むはず！！
――それは失敗フラグじゃ？――
大丈夫！・・・多分

――今日の朝
「かーーー・・・」
パチッ
「すこーーー・・・」
パチッパチッ！
「・・・ん、んー？」

バチバチバチバチッ！！
「がぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝！？」
な、何だ！？　まさか昨日のあれか！？
ゆ、油断してた！　ここまで効くとは！！
魔法だから物理的な損傷は無いはず。　体内だけだから布団とかも
大丈夫だけど・・・こ、これはきつい！

――時間を戻す
「まあ、俺の事はいいんだ
早く教室に入ろう」
「あ～ん！　ま、まだ心の準備が・・・・」
「みんな、おはよーっ！」
「おはよう」
「あ♪　ネギ君、レント先生、アスナー」
ん？　まき絵は元気になったみたいだな
「おはよー
ん、ネギ君どうしたの？」

・・・エヴァは居ないか・・・

「まきちゃんもう平気？」

「すっかり」

「何も覚えてないらしいぞ」

出席番号６番　大河内　アキラ・・・アキラが心配してるみたいだな
ほとんど話したことが無いけど、随分優しいみたいだな

「あ・・・いない・・・・エヴァンジェリンさん・・」

「――マスターは学校には来ています
すなわちサボタージュです」

「わ・・・・わあっ！？」

茶々丸か
常にエヴァと一緒に居るわけじゃないんだな

「・・・・お呼びしますか、先生？」

「い、いやとんでもない！
いいです！　いいですぅ！！」

・・・ちょっと話してくるか

「ネギ、ＳＨＲは任せた」

「え、ええ？　どうして？」

「ちょっと・・・・な」

多分屋上に居るよな・・・

主観　エヴァンジェリン

ふう・・・今日もサボるか

坊やが担任になってからいろいろ楽になった

「おーい。　エヴァー？」

・・・同時に厄介な奴も来たがな・・・

「やっぱりここだったのか」

「何の用だ？」

「何の用だ？って、大体解ってるだろ？」

「・・・昨日の事か？」

「まあ、それもあるけど・・・どうせ次の満月までは魔力はほとんど無い状態なんだろ？　それなら別にいい。　満月の時は俺がネギ

の近くに居るから」
たしかに、こいつがいれば血を吸うのが難しくなるだろう・・・
「報復するつもりも全く無い。　俺にとってはエヴァも3―A生徒の一人だからな」
「あんなノー天気な奴らと私を一緒にするな」
「そう言うなって
とにかく、ネギを狙うのを止めるっていう選択肢は無いのか？」
「当然だ
この呪いを解くためだからな」
「そう、か
・・・ま、それはそうと・・・授業はサボるなよ？
ネギの英語の時間にエヴァが来たら授業が進まなくなりそうだから取り敢えず見逃すけど・・・他の授業は出ろよ」
「わかったから早く教室に戻れ」
授業に出るつもりは無いがな
「・・・本当にちゃんと出てくれよ？」
・・・ようやく教室に戻ったか
フ・・・あいつは私の力を封じているのは結界だけだと思っているなもっとも、私も気付いたのは最近だが・・・
ふふふ・・・私の力が戻るその時が楽しみだよ

――昼

「ふわ～あ・・」

昼はねむい・・

パシッ！パシッ！

「む

何か来たな・・・・結界を越えた者が複数いる

学園都市内に入り込んだか・・」

仕方ない、調べるか・・

全く厄介な呪いだ

――

主観　レント

んー・・・仕事終わり！

ネギはもう帰ったか・・・部屋に戻ったら明日の準備をして・・・

「ただいまー」

って、言っても返ってこないけどな

「はい。　おかえりなさい」

・・・え？

部屋の確認――

いつもと同じ、最低限の物しか置いていない、ほとんど私室となっている宿直室・・・

だけど！　一ヶ所だけ不自然なところがある！　それは――

「お久しぶりです、レント様」

喋る白猫が居ること・・・！

「って・・・サフラン？

何でここに居るんだ？」

「それを話すと長くなるんですが・・・」

「つまり・・・あの時言ってた修行っていうのが終わって、俺に会

うためにウェールズの家に行ったらネカネさんしか居なかった。
ネカネさんから俺が日本の麻帆良学園に行った。　ってことを聞いたから向かった。
日本に来たとき、偶然ネギの友達のおこじょ妖精であるアルベール・カモミールと会った」

「はい
でも、麻帆良学園に入ったあたりではぐれてしまって・・・」

「そうか・・・」

ネギに伝えたほうがいいよな・・・

「よし、ネギのところに行くか」

「わかりました」

「ネギーッ！」

ん？

「ちょっと・・・ネギ、どこ行っちゃったのよ・・・・」

「ネギがどうかしたのか？　アスナ」

「あ、レント！　ネギが突然いなくなったのよ！　もしかしてエヴァンジェリン達に捕まって・・・」

エヴァに？

「それは無いと思う
今のエヴァなら満月が近付かない限りはネギを襲ったりする事はないはずだからな」

「え・・・・？　どういうこと？」

「満月が無い時は普通の人と変わりないってことだよ
吸血鬼じゃないからネギをさらっても血は吸えない」

「そうなんだ・・・それで、どうしたの？　そのネコ」

そういえば肩に乗せてたな

「サフラン、喋っても大丈夫だ
この子・・・明日菜は魔法について知ってるから」

「そうでしたか
アスナさん、これからよろしくお願いしますね」

「え？・・・えぇぇぇぇ！？
ね、ネコが喋ったぁあああ！？」

「あ～・・・まあ、その反応が普通だけどな」

何事もなかったようにされても困る

「深く考えるなよ
それより、ネギは――」

キャーッ！！

今のは・・・3―A生徒の声？
しかもネギの魔力も感じる

「明日菜、ここの下って何がある？」

「え、えーっと・・・そうだ！　大浴場！！」

大浴場か・・・女子寮の大浴場に俺は入れないよな

「じゃ、明日菜に頼んだ。多分、ネギも居るから連れてきてくれ
俺達は・・・明日菜達の部屋の前で待ってるから」

「うん、わかった！」

――――――――――――――――――――――――――――――――

――部屋前

「・・・なかなか帰ってこないな」

「・・・そうですね

それにしても、レント様がお元気そうで安心しました」
「心配したのはこっちの方だよ。　「レント様の力になれるように、修行してきます！！」って、言ったきり場所も解らなかったからなあと、そのレント『様』って呼び方止めないか？　やっぱ、堅苦しい」
「ご、ごめんなさい・・・でも、世界の様々なところへ行って、使い魔としての知識や力を身に付けてきたんですよ？
呼び方は変えません。　レント様は私の命の恩人ですから」
時々頑固なんだよな、こいつは
「それに・・・体は大丈夫か？」
「レント様から頂いた首輪のおかげです
これがなければ、私は少し光に当たるだけで焼けてしまいますから」
そうなんだよな・・・サフランはアルビノって呼ばれる個体に当てはまる
「詳しい事はｗｉｋｉとかで調べてください」と言わなければならない気がしたので言っておく
その首輪に色々細工して、普通の猫ぐらいの活動が出来るようになってる
「ま、元気そうでなによりだ」
「お、レントの兄貴じゃねーか」
ん？　下か

「久し振りだな、カモ」
「アルベールさん！　ご無事でしたか」
「――で、何でそれを持ってるんだ？」
それ――女性用の水着だけど・・・まさか
「大浴場で何かやってたわけじゃないよな？」
「や、やだな～　俺っちがそんなことするおこじょに見えるんすか？」
うん、見えるから言ってるんだけどな
誰かに叩かれたような頭の怪我とか、その水着とか
「ま、いいか
それはちゃんと返してこいよ」
「ふ――　また今日もドタバタな一日だったわよ・・」
明日菜達が帰って来たみたいだな
木乃香・・・は居ないか、ちょうどよかった
「え？　兄さん、何でここに？」
「ネギに伝える事が会ったんだけど・・・
取り敢えず、二人ともお帰り」
「ただいま～」

「ただいま・・・あーっ！　サフランちゃん！！」

「お久しぶりです。
ネギ君も大きくなられましたね」

前に二人・・・というか一人と一匹が会ったのはいつだったかな・・・？

「俺っちもいるッスよ！」
「だ、誰！？」

「下、下！
俺っちだよ、ネギの兄貴
アルベール・カモミール！！　久しぶりさー♪」

「か、カモ君まで！？」

「へへっ、恩を返しに来たぜ兄貴」

明日菜が「さっきの！？」って驚いてるのを見ると・・・やっぱり何かやってたんだな

「姉さんなかなかやるねー」

「（お・・おこじょもしゃべった・・・・）」

・・・慣れてないとキツそうだな

第１０話　自由人と新しい助っ人　（改）（後書き）

樹「というわけで、新オリキャラのサフランちゃんでした～」

サ「サフラン・セージです。　これからよろしくお願いしますね」

レ「そういえば、どうやって日本に来たんだ？」

サ「え？　どうやって・・・ですか？」

レ「えーと・・・どうやって海を越えたんだ？」

サ「え！？　いえ・・・その・・・こ、こっそり船に乗ってきました・・・」

レ「やっぱりそうか

ま、しょうがないことだから、気にするなよ」

樹「サフランについては、いずれ本文でもふれます

多分、エヴァンジェリン編が終わったらになります」

レ「それでは次回も！」

樹・レ・サ「お楽しみに！！」

サ「・・・オチがありませんね」

レ「・・・いつものことだ」

第１１話　自由人と使い魔の苦悩（前書き）

樹「１０話（改）に続いて１１話（改）です」

レ「サブタイトルに（改）は付かないんだな」

樹「サブタイトル自体を変更したので・・・」

レ「ふーん・・・

それでは！」

樹・レ「どうぞ！！」

第１１話　自由人と使い魔の苦悩

――５年前　英国ウェールズの山中
一匹のおこじょが小動物用の罠に足を挟まれ、動けなくなっていた
「猫の妖精（ケット・シー）に並ぶ、由緒正しいおこじょ妖精の漢（おとこ）の俺っちとしたことが・・・・
こんな野暮なワナにひっかかっちまうとは・・・・情けねぇ」
――どうでもいいが、おこじょと言うと英国っぽくなくなるのが不思議である
ちゃんと英名もあるので気になった人は調べてみよう！――
「こんなことじゃ漢の中の漢にゃなれねぇべ
一気に引っこ抜いてやんよぉ」
その時、草陰からガサガサと音を立てて近付く人影が・・・
「あっ、ウソ！
ごめんなさい、食べないで！！」
「――大丈夫
ワナを仕掛けた大人には僕が言い訳しとくからね」
現れたのは子供――ネギ・スプリングフィールドだった
「もうひっかかっちゃダメだよ
覚えたての治癒呪文で治してあげるから
プラクテ・ビギ・ナル・・・」

――その後

「コラッ、ネギ、エモノ逃がしただろ！」

「あたっ」

叱られ、軽く頭を叩かれるネギ
そんな姿を見ていたおこじょ――アルベール・カモミールは涙を流しながら思った

「（この人こそ・・・・漢の中の漢だよ・・・・）」

「・・・・って言うのが・・・・俺っちと兄貴の出会いなんでさー♪」

「へ～～～？　漢ねぇ・・・・」

主観　明日菜

取りあえず、部屋に戻って話を聞いたけど・・・ネギが漢の中の漢・・・？

「そういえば、レントは？」

「兄さんなら、サフランちゃんの事を伝えるために、学園長先生のところへ行きましたよ？」

「そーじゃなくて・・・今の話にレントは出てこないの？」

「5年前は・・・兄さんは魔法学校を卒業して、修行をしていたころですから」

ネギも、ずっとレントと一緒に居たわけじゃないのね

「でも、休みができた時はウェールズまで来てくれたんですよ」

「ふ～ん・・・」

「――ところで兄貴、ちっとも進んでねぇみたいじゃないですか」

「え？　何が？」

「パートナー選びっスよ、パートナー選び！！

いいパートナー探さないと立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるにもカッコがつかないんでしょー！？」

「うっ・・・・それは・・・・実はこれから探そうと思ってたんだけど・・・・」

「そうスか。　でも俺っちが来たからにはもー大丈夫

俺っちは兄貴の姉さんに頼まれて助っ人に来たんすよーっ」

タバコを吸いながら言う・・・って、タバコ？　ほんとにおこじょ？

「ええっ！？　本当！？」

「も～さっきここの風呂場で調べてきたスけど、すごくいい素材だらけで・・・この中に運命的なパートナーが必ずいる！！　って思ったんスよ！！」

「へーー
何でそんなことわかるのよ」

やっぱりこいつだったのね・・・

「俺っちにはそういう能力があるんスよ
いけるぜ3―A！！　この中にきっと兄貴のパートナーが・・・・・・！！」

ガチャ

「何や何や、さわがしーなー
レント君の他に誰か来とるんかー？」

「お♪」　「わーー！！」

そ、そういえばこのかはお風呂にいたんだっけ！？

「い、いやレントは出てったから誰もいないわよー」

「レント君は帰ったんか
・・・あ～～っ！？　何やコレ！？

可愛え～っ！！　ネギ君のペットなん～～！？　うひゃ～～～♪」

このかが抱きしめてるけど・・・性格が・・・ねぇ

「みんな、見てやコレー！！」

「あっ、ちょっ・・・！」

行っちゃった・・・一応、私も行ったほうがいいかな？

・・・あれ？　みんないなくなってる？

でもレントが戻ってきたみたい

「レント、ネギ、みんなはどうしたの？」

「ん・・・それが・・・」

主観　レント

「んー、ちゃんと許可が取れてよかったな」

肩に乗ってるサフランに話し掛ける

「取れなかったら私が困りますよ」

まあそうだけど・・・あ、カモの事も言った方が良かったか？

「そういえば、正式に使い魔として雇うなら給料とかも決めないとな」

「い、いえ。　元々レント様に拾っていただいた命ですし・・・」

「だから、そんなに遠慮するなって

少しくらいは我が儘言ってもいいんだよ」

「そう、でしょうか・・・？」

「そうだよ。

謙虚なのは良いけど、謙虚すぎると俺も困るから」

――中等部女子寮

「・・・何か上の方が騒がしいな」

「美味しい料理でも作ったんでしょうか？」

「いや、それでこんなにキャーキャー言うか？」
取り敢えずは行ってみるか

――3―A生徒が何人か集まってるな
「ネギ君のペットやて」
「さわらしてー♪」
「あ～♪　たまんない肌ざわりー」
「（フフッ。　全員、俺っちの漢気にメロメロかよ）」・・・カモの事か？
「こんなとこで集まって、どうしたんだ？」
「あ、レント君」
「レント先生もどうして――って、その子はどうしたの！？」
ん？　ああ、サフランか
「俺の使い魔（ペット）」
「白猫やー♪」と木乃香

「すっごくちっさくてかわいー♪」と椎名

「もしかしたら、ティーカップに入るんじゃない？」とまき絵

「それなら、私達の部屋にいいのがあるよ！」と裕奈

「写真もとらへん？」と亜子

で、サフランが（強引に）連れていかれた

戸惑ってるような顔をしてたけど・・・まあ、３―Ａ生徒に関わる

良い機会だな

手荒には扱わないだろうし

「レント、ネギ、みんなはどうしたの？」

明日菜か

「ん・・・それが・・・」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「と、いうわけ」

「え、と・・・サフランちゃんが連れていかれて――」
「ひどいじゃないですか！　レントの兄貴！！
くぅ～・・・！　猫の嬢ちゃんがオスだったらタマネギを食べさせたのに・・・！！」
「・・・この状況ってこと？」
「うん。　そういうこと」
サフランにタマネギを食べさせるなよ？
注）ペットとして飼うような動物は、大半がタマネギを食べると食中毒を起こし、死亡の原因となるので、欠片でも注意しましょう
「本当にヒドイっスよ！　何であんな時に来ちゃうんスか！？」
「偶然だったんだよ
ま、それはいいとして・・・この寮はペット飼ってもいいのか？」
下でカモが「よくないっスよ！」　って言ってるけど・・・スルーで
「大丈夫よ。　飼ってる人は少ないけど」
「それなら問題は無いな
じゃ、部屋に戻るか」
「兄さん、サフランちゃんはいいの？」
「部屋に居れば木乃香が連れてくるだろ。　多分

それより、ネカネさんにメールを書かなくてもいいのか？」

「そうだね。　お姉ちゃんにカモ君を寄こしてくれたお礼メールを書かなくちゃ」

「（！？）

あ、兄貴、いい！いい！！　別にそんなの書かんでも」

・・・ん？

「え・・・・？　何でさ？」

「え・・・・あの・・・・」

「？」

・・・何か怪しいな・・・

「実は・・・今いた娘達の中に、「これは！！」というパートナー候補がいたんスよ！！」

「えっ！？　うそっ！？」

話を逸らした・・・のか？

カモが来たのには何か裏がある？

「こ、この人っス！

もー俺っちのセンサーもビンビンス！」

「こ、これは・・・・！！」

「本屋ちゃん？」

のどか、か

好意を持ってると思うし・・・妥当と言えば妥当か？　ただ、戦うってことを考えると・・・危ないな。

　出来れば、戦闘には巻き込みたくない・・・って、今の時代、そんな事は無いか

「なんスか、「すごくカワイイ」とか書いて、兄貴もまんざらじゃないんじゃ――」

「ち、ちがっ・・・・！　そんなことないよ！！」

いつのまにか、クラス名簿に色々書き込んでるな

「と、とにかく、しばらく考えさせてーっ！！」

「あ、ネギ」

「わかったっス。　お早目に兄貴――」

ネギが出てったか・・・カモの行動が気になるな・・・パートナー選びを急ぎすぎてるような・・・パートナーの話をネギにしかしないで、俺については聞かないのも多少、不自然な気がするな

「ただいま～」

木乃香が帰って来たか

「おかえりー」

「ネギ君が走ってったけど・・・どうしたんや？」

「んー・・・考え事か何かだよ。　な、明日菜」

「そ、そうね」

「そっかー

あ、レント君、この子、ありがとな。　名前何てゆーんや？」

「ああ、サフランって言うんだ」

「ほか。　サフランちゃん、また遊びに来てな」

「ニャー」

「あはは。　サフランちゃんって言葉がわかるんかな？」

「こいつは賢いからな」

本当に理解してるんだけどな

「それじゃ、俺は帰るよ。　サフラン」

名前を呼ぶと、サフランが足から肩まで上がってくる

「もう帰るん？」

「ああ。　サフランを連れて、また来るよ」

「うん・・・」

「じゃあ、また明日学校で」

――レントには聞こえなかったが、木乃香は小さく呟いた――

「本当に言葉がわかっとったら・・・どないしよ？」

――――――――――――――――――――――――――――――――

周りには誰も居ないな

「サフラン、もう喋っても大丈夫だ

3―Aの生徒はどうだった？」

「・・・元気な人達でした」

メンバーがメンバーだったからな。　3―Aの中でも、より明るいメンバーだ

「でも、結構楽しいだろ？」

「はい・・・」

「・・・何か、疲れてる？」

「その・・・なるべく、期待に応えるようにしていたので・・・少

しだけ」
それは・・・疲れるだろうな
「今日はしっかり休む。　それに決定だな」
「あ、ありがとうございます・・・
その・・・レント様」
「ん？」
「あ・・・いえ、何でもありません」
「・・・どうしたんだ、気になる言い方して」
「ほ、本当に何でもありませんから・・・」
「ま、言いたくないなら別に良いけど・・・」
「（さっき、このかさんが・・・）」

『ウチな、君の飼い主さんのことが好きなんかもしれん。
近くにおると、安心して、ドキドキして・・・君に言ってもしょうがないんやけどな・・・』
『に、ニャー・・・』

「（ど、どうしよう！？　私からレント様に言うわけにはいかないでしょうし・・・
見てるしかない・・・でしょうか？
それに・・・少しだけ、複雑です・・・）」

――使い魔と少女の想いをよそに、本人は・・・――

「（そういえば、まだ夕食食べてなかったな・・・何にしよう？）」

――・・・そんなことを考えていた――

第１１話　自由人と使い魔の苦悩（後書き）

樹「では、後書きです
・・・って、主人公は？」

サ「レント様は・・・」

レ「どうしようかな・・・？」

サ「・・・あちらで夕食の献立を考えています」

樹「それを後書きまで引っ張る！？
後書きは一応、時系列無視なんだけど・・・まあいいか」

サ「それより、私はどうすればいいんでしょうか・・・」

樹「取り敢えずはやきもきしてもらうので、頑張れ！
それでは！」

樹・レ・サ「次回もお楽しみに！！」

樹「最後だけ出てきたね」

レ「一応・・・な」

〜〜〜作者こぼれ話〜〜〜

はい、こぼれ話です

最近、気になってるゲームがあります（基本的に年中な気もしますが（呆れ））

それはＫＨ　３Ｄ（ドリーム　ドロップ　ディスタンス）です

戦闘も画面狭しと動きまわっていました。　３Ｄでみたら目が疲れそうです

ディズニーの世界は全て新規の世界らしいです

取り敢えずは『ノートルダムの鐘』の世界がＰＶでわかりました（どんな世界かはうろ覚えですが、主人公が時計塔に軟禁されていて〜みたいな始まりだったような・・・）

修正）鐘楼でした。　よくよく考えれば、ノートルダムの『鐘』なのに時計塔っていうのも変な話です

しかし、今回一番期待しているのは、『すばらしきこのせかい』のキャラが登場することです！

『すばらしきこのせかい』は本当に好きなんですよ。

ＤＳの中でかなり大好きな作品です
続編はでないと諦めていましたが、ゲストという形でも『すばらしきこのせかい』のキャラが登場するのは嬉しい限りです
ソラとネクのやり取りも面白かったです
そういえば、ＫＨのロクサスと、すばらしきこのせかいのネクは中の人が同じだったような・・・

・・・まずは３ＤＳを買わないとなぁ～　と思います

それでは、評価、感想、質問などがあればお願いします

第１２話　自由人と使い魔達（前書き）

樹「どうも、作者の樹ー打守です」

レ「レント・スプリングフィールドです」

樹「うーん・・・結構遅くなってしまいました。　すいませんでした」

レ「しかも短いしな」

樹「・・・はい・・・すいません・・・」

レ「文章力も無いし」

樹「あ・・・はい・・・ほんと・・・すいません・・・」

レ「他にも――」

樹「そ、それでは本文へ！」

レ「・・・逃げたな」

第１２話　自由人と使い魔達

――夕食後

「「ごちそうさまでした」」

手を合わせる１人と一匹の猫。　かなりシュールな光景である

「まさか、サフランが料理を作れるようになってるとは思わなかったな」

「レント様と離れてから色々あったので・・・
レント様の料理も以前より美味しくなっていますよ」

「そうか？　ま、サフランが言うならそうなんだろうな
それより、その体じゃ料理作るのも大変だろ。　無理してないか？」

「い、いえ、そんなことは！　それに、私はこれくらいしか・・・」

「そんなことは無いって
居てくれるだけでも安心するよ」

「安心・・・」

『近くにおると、安心して――』

サフランが思い出したのはついさっきの事――
もっとも、言葉は同じでも込められた意味は違うのだが

「そ、そうですか！　ありがとうございます！」

「？　どういたしまして」
サフラン自身も意味が違うことは解っているが、それでも嬉しいことは嬉しいらしい
と、同時に先行きに不安を感じているのだが・・・

――さらに暫く後

「レント様、その手紙は・・・？」

「ん。　ネカネさんに聞きたいことがあるんだ
できれば明日には返事が欲しいんだけど・・・」

「あのー・・・ここからウェールズまでですよね？」

「そうだな」

「明日中というのは少し無理があるのではないでしょうか？」

「大丈夫。　話の展開的に」

「・・・そういう発言はできる限り控えてくださいね？」

――翌日

主観　明日菜

「ネギ、急がないと遅刻するわよ」

「ま、待ってくださいよ～」

「兄貴と姐さん、意外と寮を出るの早いっスね。（起きる時間調べたし、実行は明日だぜ）」

このかは占い研究会の集まりで先に行っちゃったし・・・レントを起こしてから教室に行くと・・・間に合うかしら？・・・あ

「ちょっとネギ、レントの事はサフランちゃんに任せられないの？」

「あ・・・その・・・似た者同士なんですよ」

「？」

「す、すみません～・・・
私、朝は本当に弱くて・・・」

「ふわぁ・・・まあ、早起き出来ないのはしょうがない」

こーゆーことかー・・・

「もう、早くしないと遅刻するわよ」

「解ってるって、直ぐに朝食の用意するから
明日菜とネギとカモも何か飲むか？」

なんでそんなに落ち着いてるのよ・・・

――遅刻するという考えが１％も無いからです――

「まあ、まだ時間に余裕があるからな

ネギは紅茶でいいよな？」

「う、うん」

「明日菜はどうする？」

「はぁ・・・それならコーヒー」

「了解」

「酒は無いっスか？」

「調理用でいいなら」

「・・・遠慮するっス」

・・・この後、ＳＨＲには間に合ったけどやっぱりギリギリだった

――

放課後――
その時間には学生の生活が顕著に表れる。
ある者は部活動に勤しむ。ある者は家まで一直線。
ある者は寄り道をしながら帰る。
ある者は委員会や生徒会で学校に残ることとなる・・・

「・・・それが何か関係あるのか？」

――いや、別に――

「何で話したんだよ？」

――さあ？　放課後に時間が進んだから？――

「・・・投げ遣りすぎだろ！」

――まあぶっちゃけ文字数稼ぎ？――

主観　レント

「ぶっちゃけるな！！」

「ど、どうしたんですか！？」

そうか、サフランと部屋に戻ってる途中だったな

「・・・いや、何でもない

それより早く部屋に戻ろう。　手紙が来てる筈だ」

「お、やっぱり来てる」

今回は普通の手紙か

「・・・本当に返ってきたんですね」

ま、ご都合主義だから

「サフラン、見てくれ」

「はい・・・・え？」

「カモは日本に逃げてきたみたいだな」

「でも・・・その理由が下着泥棒ですかー・・・・」

うーん・・・・納得。

逃げてきたなら目的があるはずだな・・・カモはネギにパートナー決めを勧めていた。　パートナー決め＝仮契約とするとどうなる・・・

「・・・成る程」

仮契約が手柄として認められれば、カモはネギの使い魔になれる

マギステル・マギ候補生、サウザンドマスターの息子、その使い魔を連れ帰る。　なんてことはできないからな
無罪放免・・・か
ま、そんなに深刻な罪でもないから別にいいとは思うけどな

「もぉ・・・レント様一人で納得しないでください」

「ごめんごめん
でも予想だからな、悪い予想を聞くと悪い印象が強くなる」

「いえ・・・下着泥棒ということで既に印象が悪くなりつつありますが・・・」
女の敵です！　と、サフランは続けた。　これはカモの自業自得だな

「それじゃ、当事者のとこへ行ってみるか」

レントが立ち上がり、入り口の扉へと近付いた時

「レントー。　いるー？」

そんな声が聞こえてきた

「明日菜か。　ああ居るよ」

「それで？　どうしたんだ？」

「今日の授業でわからなかったことを教えてもらいたくて・・・ん？　何？　この手紙・・・」

あ・・・しまった

「・・・何コレ！？　昨日のあいつ、悪いコトして逃げて来たの！？」

「ああ、うん。　そう」

バレた以上は・・・しょうがないか

――簡単に説明後

「・・・ちょっとネギの様子見てくる」

「少し気になるので私も行ってきますね」

「ん、そうか

ちなみにネギは・・・寮の方に居るみたいだ」

と、送り出して暫く

「ん～・・・何だかんだ言っても、ネギはカモを使い魔にするような気がするな」

基本的に魔法使いと使い魔は持ちつ持たれつだからな
寧ろサフランみたいに忠義で使い魔になってるのは少ないんじゃないか？

「ま、何でもいいか。　・・・寝てよう」

「ただいまです・・・」

「・・・ん、おかえり
って、何かあったのか？」

「私・・・誤解を・・・していました・・・」

「・・・は？」

誤解？　ってか、半泣き？

「アルベールさんは・・・妹さんの・・・ために・・・」

「・・・明日菜、説明してくれ」

「あ、うん・・・」

――――――――――――――――――――――――――――――

「ってこと」

「ふ～ん」

大体は予想通りか

気になるのは・・・

「病弱な妹・・・ねぇ」

下着泥棒の理由もそれだとか。　ネギも知らなかったみたいだから

な・・・本当かどうか・・・

「ま、どっちでもいいか。　敵じゃないんだ。　それより・・・」

「・・・う・・・くっ・・・」

「・・・どうやって泣き止ませればいいと思う？」

「さあ・・・？」

――素直で純粋な猫の少女は、長い間泣き続けたとか――

第１２話　自由人と使い魔達（後書き）

――――後書き通信！――――

樹「う～ん・・・」

サ「どうかしたんですか？」

樹「・・・ネタが無い」

レ「最初から行き当たりばったりだったと思うけど」

樹「あと、反省中です

話は中途半端に区切るより一つにしたほうがいいと痛感しました。

１１話と１２話はまとめて１１話にしたほうがよかったな、と

とりあえず、これからも頑張っていくので、感想、意見、評価、指

摘など、お願いします！

それでは、また次回で！！」

～～～作者こぼれ話～～～
はい、こぼします
察しのいい方は気付かれたかもしれませんが、テンプレ化していた挨拶を止めました。　深い理由はありませんが・・・

ではゲーム話
戦国ＢＡＳＡＲＡ３宴・・・買いたいなぁ・・・とはいえ、しばらくはお預けです
テイルズ　オブ　イノセンスＲ・・・良作の予感がします。　まあ、『新機種』という大きな問題がありますが・・・
う～ん・・・こっちでも話すネタが少ない・・・無いわけではありませんが・・・割愛します
それでは、また次回で

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3103u/

自由キマま！な学園生活

2011年11月17日19時34分発行